

国際関係史の研究（HHM03）

通年

Research on the History of International Relations

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 時任英人

授業の概要

冷戦崩壊後の国際社会は、その行く末が容易に見えてこないため、日本を取り巻く国際政治は混沌とした状況にあるといつてよい。それゆえ、アジアにおける日本の外交は、今後の明確な方向性を模索している状況下にある。そこで、本科目では、そうしたアジアにおける日本外交の現状と将来を理解するために、近代から現代に至る日本を中心とするアジアの国際関係史（たとえば、日本と中国・朝鮮・アメリカなどとの関係史）を歴史のおよび理論的に考察できるような専門知識・技能を身に着ける。

到達目標

1. アジア地域の国際関係史と日本政治外交史を理解する。
2. その過程で日本・アメリカ・朝鮮半島・中国の近代史を理解する。

評価方法

講義時の討論・質疑応答及びレポートにより評価する。評価は、レポート80%（到達目標1を評価）、質疑応答20%（到達目標2を評価）の重みで判定する。

注意事項

国際関係史、国際関係論に関する概論を予め理解しておくこと。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション（東アジアにおける近代国際政治秩序の胎動）
第2回	近代朝鮮半島をめぐる国際関係
第3回	アメリカのフロンティアの消滅と太平洋への進出
第4回	日清戦争と日米中露関係
第5回	日露戦争をめぐる同盟関係と権力政治
第6回	日露戦後のアメリカの台頭と日英同盟
第7回	1910～20年代の中国をめぐる日米中関係
第8回	日中戦争をめぐる国際政治
第9回	第二次大戦に向かうドイツと日米関係
第10回	第二次大戦の終結
第11回	戦後の日米関係と冷戦開始
第12回	中国の政治状況と朝鮮戦争
第13回	日米安保条約と冷戦外交
第14回	デタントと冷戦の終焉
第15回	現代日本外交をめぐるアメリカ・中国・朝鮮半島
第16回	東アジアの思想研究のための方法論

回数	内容
第17回	アジアを認識するための視座 I (アジアに対する近世日本の認識)
第18回	アジアを認識するための視座 II (アジアからの近代日本に関する認識)
第19回	国民国家の形成と思想の連鎖・西洋と東アジア世界
第20回	近代における東アジアでの留学の意義
第21回	結社と文化の翻訳
第22回	東アジアの国際関係
第23回	国家形成における平準化・類同化・固有化
第24回	アジアをめぐる知の変転
第25回	日本漢語の流布と政治文化の変容
第26回	外交政策の思想的枠組みとしての「アジア主義」
第27回	二つの国家大系と東アジア間外交
第28回	アジア主義外交という言葉のディレンマ
第29回	空間的東アジアの意義
第30回	まとめと総括質疑&レポート提出

授業外学習

学習時間の目安:合計120時間
予習: 教科書の該当ページを読んで概略をつかむ。
復習: 紹介する参考図書・文献にあたり、講義内容をまとめる。
それぞれの単元のテーマで課題レポートを作成し、提出すること。

教科書

|山室信一『思想課題としてのアジア―基軸・連鎖・投企』(岩波書店、2001年)ISBN-13: 978-4000233491

参考書

講義に際して適宜紹介する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 時任英人

授業の概要

本演習では、アジアにおける日本外交の現状と将来を理解するために、近代から現代に至る日本を中心とするアジアの国際関係史（たとえば、日本と中国・朝鮮・アメリカなどとの関係史）に関する歴史のおよび理論的研究を概観する。その後、参加者が自分でテーマを選び、それについて理論を使って分析し、報告する。

到達目標

1. 国際関係論の政治外交史についての理解を深める。
2. 具体的な国家間の相互作用としての外交についての基本的な認識を持つ。
3. 方法論と事例の整合性を理解する。

評価方法

講義時の討論・質疑応答及びレポートにより評価する。評価は、レポート80%（到達目標1,2を評価）、質疑応答20%（到達目標3を評価）の重みで判定する。

注意事項

・講義では、課題について理解することを前提とする。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション (本演習の目的と概要)
第2回	国際関係史を研究するための方法論 1.歴史的アプローチ—実証的方法論について理解する
第3回	国際関係史を研究するための方法論 2.歴史的アプローチ—国際関係思想史の方法論について理解する
第4回	国際関係史を研究するための方法論 3.歴史的アプローチ—カー、モーゲンソー、シューマン、ナイらの方法論とその成果を理解する
第5回	国際関係史を研究するための方法論 1.国際体系的アプローチ—シンガーらの方法論とその成果を理解する
第6回	国際関係史を研究するための方法論 2.国際体系的アプローチ—ウォーラステインらの方法論とその成果を理解する
第7回	国際関係史を研究するための方法論 1.政策決定論的アプローチ—スナイダー、ペイジらの方法論とその成果を理解する
第8回	国際関係史を研究するための方法論 2.政策決定論的アプローチ—アリソン、ハルペリンらの方法論とその成果を理解する
第9回	国際関係史を研究するための方法論 3.政策決定論的アプローチ—ジャニス、スタインブルーナーらの方法論とその成果を理解する
第10回	国際関係史を研究するための方法論 1.構成主義的アプローチ—ウエント、カツツエンスタインらの方法論とその成果を理解する
第11回	国際関係史を研究するための方法論 2.構成主義的アプローチ—フィネモネ、シッキングらの方法論とその成果を理解する
第12回	国際関係史を研究するための方法論 3.構成主義的アプローチ—石田、宮岡らの方法論とその成果を理解する
第13回	理論の具体的適用 1 (アヘン戦争から日清戦争まで)
第14回	理論の具体的適用 2 (日露戦争から第一次大戦まで)
第15回	理論の具体的適用 3 (1920年代から第2次大戦まで)

回数	内容
第16回	理論の具体的適用 4 (戦争終結から冷戦の開始まで)
第17回	理論の具体的適用 5 (日米安全保障条約の締結からベトナム戦争)
第18回	理論の具体的適用 6 (日中国交回復から冷戦終結)
第19回	事例発表 1
第20回	事例発表 2
第21回	事例発表 3
第22回	事例発表 4
第23回	事例発表 5
第24回	事例発表 6
第25回	事例発表 7
第26回	事例発表 8
第27回	事例発表 9
第28回	事例発表 1 0
第29回	事例発表 1 1
第30回	レポート提出及び総括質疑

授業外学習

学習時間の目安：合計30時間

予習: 教科書の該当ページを読んで、概略をつかむ。

復習: 紹介する参考図書・文献にあたり、講義内容をまとめる。

課題レポートを作成する。

教科書

ジョセフ・S.ナイ ジュニア (著), デイヴィッド・A. ウェルチ (著), 田中 明彦 (翻訳), 村田 晃嗣 (翻訳) 『国際紛争 -- 理論と歴史 原書第10版』978-4641149175

参考書

講義に際して、何冊かの書籍を紹介する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 権純珍

授業の概要

・修士課程レベルのミクロ経済学を講義する。ミクロ経済学の理論及び分析手法を身につけると共に、最近の経済問題へと事例を展開しながら講義を進行する。

到達目標

- 1 ミクロ経済学の理論体系を理解できる。
- 2 市場経済の効率性についての分析能力を習得する。
- 3 経済のグローバル化に対応できる能力を身につける。

評価方法

・授業に取り組む姿勢（授業中の討議への参加を含む）（40％）、前後期に課すレポート（60％）等で総合的に評価する。

注意事項

- ・学習内容を十分に予習及び復習することが必要である。
- ・学部レベルのミクロ・マクロ経済学及び経済数学の知識、英語読解力を持つこと。

授業計画

- 第1回 理論経済学研究の概要
- 第2回 ミクロ経済学の考え方
- 第3回 消費者行動の理論(1)(効用関数)
- 第4回 消費者行動の理論(2)(限界代替率)
- 第5回 消費者行動の理論(3)(消費者の需要曲線)
- 第6回 消費者行動の理論(4)(効用最大化の問題)
- 第7回 企業行動の理論(1)(生産関数)
- 第8回 企業行動の理論(2)(費用関数)
- 第9回 企業行動の理論(3)(費用曲線と供給曲線)
- 第10回 企業行動の理論(4)(利潤最大化の問題)
- 第11回 市場構造理論(1)(完全競争市場)
- 第12回 市場構造理論(2)(不完全市場：独占)
- 第13回 市場構造理論(3)(不完全市場：寡占)
- 第14回 市場構造理論(4)(外部性と公共財)
- 第15回 中間まとめ（レポートの講評を含む）
- 第16回 異時点間の資源配分(1)(貯蓄と投資)
- 第17回 異時点間の資源配分(2)(世代重複モデル)
- 第18回 一般均衡理論(1)(純粋交換モデル)
- 第19回 一般均衡理論(2)(パレート効率性)
- 第20回 一般均衡理論(3)(生産可能性集合)
- 第21回 部分均衡理論(1)(部分均衡モデル)
- 第22回 部分均衡理論(2)(2財モデル)
- 第23回 ゲーム理論(1)(ゲーム理論の概念)
- 第24回 ゲーム理論(2)(囚人のジレンマ)
- 第25回 ゲーム理論(3)(ゼロ和ゲーム)
- 第26回 ゲーム理論(4)(市場参入阻止ゲーム)
- 第27回 ゲーム理論(1)(クールノーモデル、ナッシュ均衡等)

第28回 情報の非対称性(1)(経済主体の行動)

第29回 情報の非対称性(2)(逆選択等)

第30回 総まとめ（レポートの講評を含む）

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間

- ・中級レベルのミクロ経済学やその関連文献を読み、自学自習すること。
 - ・前後期にそれぞれ1つのレポートを課すので、平素から授業の予習・復習をしておくこと。
-

教科書

- ・特に指定しない。
 - ・必要に応じて資料等を配布する。
-

参考書

- ・参考書及び文献等は必要に応じて随時、指示する。
-

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4． 0 単位
担当教員	 坂本尚史

授業の概要

持続可能な地球社会の構築に向けて、様々な方面から多様な取り組みがなされている。この講義では地球環境問題の概略を解説した後に、市場メカニズムを応用した、いわゆる経済学的手法を応用した環境対策・政策について展望する。

到達目標

- 1． 環境問題の現状について理解できる。
- 2． 環境政策の分野においても市場メカニズムを利用した経済的手段が有効であることが理解できる。

評価方法

授業の理解度70%（到達目標 1 を評価）、レポート内容15%（到達目標 2 を評価）、レポート発表15%（到達目標 2 を評価）とする。

注意事項

積極的な授業態度が望まれる。

授業計画

- オリエンテーション
- 地球環境問題の概要
- 地球環境問題発生の原因
- 地球環境の現状（1）：地球温暖化について
- 地球環境問題の現状（2）：京都議定書とその問題点
- 地球環境問題の現状（3）：パリ協定とその後
- 地球環境問題の現状（4）：オゾン層の破壊について
- 地球環境問題の現状（5）：モントリオール議定書とその後
- 地球環境問題の現状（6）：化学物質のリスク
- 地球環境問題の現状（7）：生物多様性
- 地球環境問題の現状（8）：廃棄物問題
- 地球環境問題の現状（9）：エネルギー資源
- 地球環境問題の現状（10）：再生可能エネルギー
- 環境問題への対応（1）：環境基本法等
- 環境問題への対応（2）：環境基準
- 環境問題への対応（3）：環境アセスメント
- 環境問題への対応（4）：環境リスクマネジメント
- 環境問題への対応（5）：環境リスクの算出
- 電力とエネルギー（市場メカニズムを活かした政策推進）
- 食糧資源と水環境（農業における水質汚染をどう解決するか）
- 水産資源（漁業者のインセンティブを活かした管理方法）
- 森林資源（国内林業を同制度設計するか）
- 生物多様性と経済政策（保全において市場メカニズムをどう活用するか）
- 廃棄物管理（市場メカニズムを活かした管理手法）
- 二酸化炭素（排出権取引の可能性）
- 外来種の管理（市場メカニズムを活かした管理は可能か）
- 開発権（持続可能な開発を目指した鉱業権）
- 水利権（市場メカニズムを活かした効率的配分）
- レポート発表

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間

- ・この講義では、受講生との議論を中心に授業を進めるため、事前に十分な時間をかけて予習をしておくこと。
 - ・新聞やテレビのニュースで取り上げられている環境問題を中心に環境問題についてまとめておくこと。
 - ・復習として課題レポートを4回出題する。
-

教科書

「資源と環境の経済学」馬奈木 俊介編・昭和堂・ISBN978-4-8122-1230-1

必要に応じてプリントを配布する。

参考書

適宜、授業中に紹介する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 河野正英

授業の概要

国際取引を理解するには、経済活動に関する知識だけでは足りず、各国・各地域の政治的傾向やその国・地域の持つ社会的特質についても知っておく必要がある。この研究では世界全体に共通する事象と地域的な特色とを組み合わせ、国際取引について理解を進めて行く。国際取引の枠組みに関係する国際的枠組みや資本市場に大きな影響のある政策について理解することで、国際取引の将来像も掴めるようになる。

（＊分野としては社会科学の分野の法学、政治、経済、経営に関連する科目である。）

到達目標

- 1) 国際取引の原理を理解し、説明出来る。
- 2) 世界経済・社会の現状について理解し、説明出来る。
- 3) アジア地域（東アジア・東南アジア・南アジア）の現状について理解し、説明出来る。
- 4) 日本の経済だけでなく社会的・文化的特質を理解し、説明出来る。
- 5) 企業経営について理解し、説明出来る。
- 6) 金融と実体経済の兼ね合いについて理解し、説明出来る。
- 7) イノベーションについて理解し、説明出来る。

評価方法

授業の予習・復習の態度：評価割合30%（各小テーマ毎に到達目標を確認）

授業時間内の応答：評価割合30%（各小テーマ毎に到達目標を確認）

まとめレポート（計2回）：評価割合40%（到達目標 1)~7)を確認）

*合格基準は60点。

注意事項

国際取引法研究を主にして国際取引法演習を補完科目として考えているので、必ず両方の科目を併せて履修するように。

授業計画

第1回 大学院での研究と演習の進め方について説明する。第1回目として国際取引の特徴全般について説明し、次回以降の大枠のテーマと各回毎の小テーマについて説明する。

第2回 日本経済・社会の現状と今後の課題について研究する。この大枠のテーマについての研究は第11回までを予定しており、今回の小テーマとしては戦後の経済秩序について概観する。

第3回 日本経済・社会の現状と今後の課題の2回目。今回の小テーマとしては日本経済の特徴について検討する。

第4回 日本経済・社会の現状と今後の課題の3回目。今回の小テーマとしては戦前の財閥と戦後の日本企業のグループ化について検討する。

第5回 日本経済・社会の現状と今後の課題の4回目。今回の小テーマとしては日本の労働市場について検討する。

第6回 日本経済・社会の現状と今後の課題の5回目。今回の小テーマとしては日本の経営理念について検討する。

第7回 日本経済・社会の現状と今後の課題の6回目。今回の小テーマとしては金融市場の変遷と証券会社・銀行の業務内容の違いについて検討する。

第8回 日本経済・社会の現状と今後の課題の7回目。今回の小テーマとしては日本政府の負債と保有資産について検討する。

第9回 日本経済・社会の現状と今後の課題の8回目。今回の小テーマとしては日本企業のキャッシュ・フローについて検討する。

第10回 日本経済・社会の現状と今後の課題の9回目。今回の小テーマとしては日本国内における個人保有の資産について検討する。

第11回 日本経済・社会の現状と今後の課題の10回目。今回の小テーマとしては政府のあり方・経済政策・福祉政策について検討する。

第12回 世界経済全般についての課題を研究する。この大枠のテーマについての研究は第21回までを予定しており、今回の小テーマとしては2008年リーマンショック以後の財政と税の問題について検討する。

第13回 世界経済全般についての課題の2回目。今回の小テーマとしては金融と直接投資について検討する。

第14回 世界経済全般についての課題の3回目。今回の小テーマとしては資本移動と多国籍企業の活躍、労働市場の流動化について検討する。

第15回 世界経済全般についての課題の4回目。今回の小テーマとしてはGDP・市場規模と国民生活について検討する。

- 第16回 世界経済全般についての課題の5回目。今回の小テーマとしては通貨と貿易、ベーシックインカム論について検討する。
- 第17回 世界経済全般についての課題の6回目。今回の小テーマとしては経済成長と金価格、不動産価格との相関について検討する。
- 第18回 世界経済全般についての課題の7回目。今回の小テーマとしては国家資本主義と私有財産制について検討する。
- 第19回 世界経済全般についての課題の8回目。今回の小テーマとしては資本主義の長短と民主主義システムとの兼ね合いについて検討する。
- 第20回 世界経済全般についての課題の9回目。今回の小テーマとしては金融危機と経済危機との相関について検討する。
- 第21回 世界経済全般についての課題の10回目。今回の小テーマとしてはイノベーションによる既存の国家体制への揺さぶりについて検討する。
- 第22回 アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題を研究する。この大枠のテーマについての研究は第28回までを予定しており、今回の小テーマとしては各地域の安全保障体制と経済の特徴、人口問題について検討する。
- 第23回 アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題の2回目。今回の小テーマとしては朝鮮半島情勢の推移と中国の地域覇権国化について検討する。
- 第24回 アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題の3回目。今回の小テーマとしては人口増大と投資活動の活発化について検討する。
- 第25回 アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題の4回目。今回の小テーマとしては環境問題（地球温暖化）と経済成長、CO2回収技術の向上について検討する。
- 第26回 アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題の5回目。今回の小テーマとしては日本企業の持つ素材技術、省エネ技術が東アジアの発展の問題点を解決するヒントとなる点を検討する。
- 第27回 アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題の6回目。今回の小テーマとしては増大する人口とインフラ投資について検討する。
- 第28回 アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題の7回目。今回の小テーマとしてはアジアの歴史と文化について知り、これと日本の歴史との関わり合いについて検討する。
- 第29回 国際経済全般の将来像についての予測が出来るかどうかを2回に分けて検討したい。まず世界人口の推移、各国GDPの推移、地域覇権国の入れ替わり、政治システムの変化、農業へのバイオテクノロジーの導入、生産性革命、エネルギー革命などについて検討する。
- 第30回 国際経済全般の将来像についての予測が出来るかどうかの検討の続き。今回のテーマとしてはAI化と自動化、農業の工業化・自動化と生産性の向上、自動化と社会システムの変化、既存の政治システムの行き詰まり、社会の中における人間関係の変化、家族観の変化、労働に対する価値観の変化などを検討する。

授業外学習

- 第1回 大学院での研究と演習の進め方について説明があるので、今後の予習・復習の進め方と学習時間についてよく計画すること。（標準学習時間120分）
- 第2回 予習：日本経済・社会の現状について各自で調査し、考える力を身につけるようにする。復習：戦後の経済秩序について概観したので、ノートによく整理し、場合によっては図解して自分の言葉で説明出来るようになること。（標準学習時間120分）
- 第3回 予習：日本経済の特徴について調べておき、予め一定の知識を持つように努める。復習：特に労使関係や技術開発投資の歴史について整理しておくこと。（標準学習時間120分）
- 第4回 予習：戦前の財閥と戦後の日本企業のグループについて調べておく。復習：現在の企業グループは流動化していることを理解し、新興企業の勃興と躍進が経済を活性化させることを理解するようになる。（標準学習時間120分）
- 第5回 予習：アベノミクス前後で雇用者数/失業率がどのように変化したかを予習して調べておく。復習：金融政策と労働市場が高い相関関係にあることを理解し、マスメディアの報道がなぜその逆であったかの理由をよく考える。（標準学習時間120分）
- 第6回 予習：日本の経営者と欧米の経営者の考え方の違いがどこから来るかを予め考えておく。復習：日本の経営者の経営理念について理解し、今後の企業経営がどうあるべきかを具体的に予測出来るようになる。（標準学習時間120分）
- 第7回 予習：日本では個人資産のほとんどが不動産と銀行預金であった理由を自分なりに考えておく。復習：金融市場の変遷と証券会社・銀行の業務内容の違いについて理解し、個人の資産形成にとって有利な方法を予測出来るようになる。（標準学習時間120分）
- 第8回 予習：マスコミ報道の内容が実際と異なることを自分で調べ、予備知識として持っておくようにする。復習：日本政府の負債と保有資産について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）
- 第9回 予習：特に90年代以降に日本企業がキャッシュ・フローを重視する経営に切り替えてきたことを調べておくようにする。復習：日本企業の持つキャッシュ・フローの大きさについて理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）
- 第10回 予習：90年代以降にマスメディアでは盛んに日本社会の分断や格差社会というテーマを扱ってきたが、現状はどうなっているのかを調べておくようにする。復習：日本国内における個人保有の資産について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）
- 第11回 予習：資本主義においては民間の企業活動に対する政府の役割は小さいはずであるが、戦後の日本社会においては政府の力が大きかったことを調べておくようにする。復習：政府のあり方・経済政策・福祉政策について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）
- 第12回 予習：世界経済全般について自分で調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：リーマンショック以後の財政と税の問題について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）
- 第13回 予習：金融と実体経済との関係について自分で調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：金融と直接投資について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）
- 第14回 予習：多国籍企業とは何かから始まって、現在の世界経済の実態を自分で調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：資本移動と多国籍企業の活躍、労働市場の流動化について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第15回 予習：60年代〜80年代〜2000年代と日本のGDPがどのように変化してきたかを自分でグラフ化してみるようにする。復習：GDP・市場規模と国民生活について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第16回 予習：究極の福祉政策とも呼ばれるベーシックインカム論について、予備知識を持っておくようにする。復習：通貨と貿易、ベーシックインカム論について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第17回 予習：急速にキャッシュレス化に向かっているおカネの世界において、おカネとは何か、資産とは何かを予め考えておくようにする。復習：経済成長と金価格、不動産価格との相関について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第18回 予習：90年代以降には民主制を否定ないしは無視する国家資本主義が一定の成功を収めた。その理由について自分で調べ、自分なりの考えを持っておくようにする。復習：国家資本主義と私有財産制について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第19回 予習：20世紀は資本主義と社会主義との闘いであったが、21世紀にはネット社会の急激な進展に伴い、資本主義やこれを支える民主主義自体への信頼が揺らぐようになった。現状について自分で調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：資本主義の長短と民主主義システムとの兼ね合いについて理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第20回 予習：金融危機と経済危機について調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：金融危機と経済危機との相関について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第21回 予習：産業革命が経済だけでなく社会システムそのものの変化を促すことが知られている。過去に起きた産業革命について調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：イノベーションによる既存の国家体制への揺さぶりについて理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第22回 予習：東アジアの政治と経済、東南アジアの政治・経済・文化、南アジアの政治・経済・文化について自分で調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：各地域の安全保障体制と経済の特徴、人口問題について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第23回 予習：朝鮮半島の歴史と現状について、および中国の文化と日本との差異について自分で調べ、一定の予備知識を持っておくようにする。復習：朝鮮半島情勢の推移と中国の地域覇権国化について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第24回 予習：アジア地域（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域）について自分で調べ、経済活動の現状について予備知識を持っておくようにする。復習：アジア地域における人口増大と投資活動の活発化について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

。

第25回 予習：アジア地域（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域）における環境汚染および温暖化ガス排出の問題について自分で調べ、予め一定の知識を持っておくようにする。復習：公害問題・地球温暖化と経済成長、新技術としてのCO2回収技術の進展について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第26回 予習：日本企業の持つ技術的特色としての省エネ技術について調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：日本企業の持つ素材技術、省エネ技術について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第27回 予習：21世紀がアジアの時代だと言われる理由について自分で調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：増大する人口とインフラ投資について理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第28回 予習：日本の特色（特に社会・経済・文化）について調べ、予備知識を持っておくようにする。復習：アジアの歴史と文化、これとの日本の歴史との関わり合いについて理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

第29回 予習：第4次産業革命とも呼ばれるイノベーションの時代における諸問題について予備知識を持っておくようにする。復習：世界人口の推移、各国GDPの推移、地域覇権国の入れ替わり、政治システムの変化、農業へのバイオテクノロジーの導入、生産性革命、エネルギー革命など、あらゆる分野で変化が起きることを理解し、自分なりの考えを図式化して次回に備える。（標準学習時間120分）

第30回 予習：イノベーションの時代における諸問題について引き続き検討するので、前回の検討内容よりもさらに詳しく予備知識を高めるようにする。復習：AI化や自動化が進むことで結果的に社会システムそのものが変化し、人の価値観そのものが変化することになることを理解し、自分の考えをまとめる。（標準学習時間120分）

* 標準学習時間の合計：合計 1 2 0 時間

教科書

授業内で指示する。

参考書

授業内で指示する。

備考

国際取引法演習（HHM09）

通年

Seminar in International Business Law

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	2. 0 単位
担当教員	 河野正英

授業の概要

国際取引法演習は国際取引法研究で学んだ知識をさらに深めるための科目として位置付ける。国際取引法研究では国際取引を政治、社会、経済、文化などの様々な面から切り取り、資本市場や貿易、多国籍企業の活動などの特徴を理解するように努める。この演習は研究に並行して開講するので、研究で学んだことを主にディベートを通じてブラッシュアップする。したがって、予習・復習はもちろんのこと、日々生じる時事問題に敏感になり、常に自分の考えを自分の言葉でまとめて発言出来るように心がける必要がある。この演習を通じて自分の考えを論理的に表現する力がつくはずである。

（＊分野としては社会科学の分野の法学、政治、経済、経営に関連する科目である。）

到達目標

- 1) 国際取引の原理を理解し、説明出来る。
- 2) 世界経済・社会の現状について理解し、説明出来る。
- 3) アジア地域（東アジア・東南アジア・南アジア）の現状について理解し、説明出来る。
- 4) 日本の経済だけでなく社会的・文化的特質を理解し、説明出来る。
- 5) 企業経営について理解し、説明出来る。
- 6) 金融と実体経済の兼ね合いについて理解し、説明出来る。
- 7) イノベーションについて理解し、説明出来る。

評価方法

授業の予習・復習の態度：評価割合30%（各小テーマ毎に到達目標を確認）

授業時間内での教員との質疑応答（毎回）：評価割合35%（各小テーマ毎に到達目標を確認）

授業時間内のディベート（毎回）：評価割合35%（各小テーマ毎に到達目標を確認）

* 合格基準は60点。

注意事項

国際取引法研究の補完科目として考えているので、必ず両方の科目を併せて履修するように。

授業計画

第1回 大学院での研究と演習の進め方について説明する。第1回目として国際取引の特徴全般について説明し、次回以降の大枠のテーマと各回毎の小テーマについて説明する。

第2回 大枠のテーマおよび小テーマは研究（国際取引法研究）に準ずる。研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：戦後の経済秩序なので、これについての質問やディベートを行う。

第3回 研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：日本経済の特徴なので、これについての質問やディベートを行う。

第4回 研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：戦前の財閥と戦後の日本企業のグループ化なので、これについての質問やディベートを行う。

第5回 研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：日本の労働市場なので、これについての質問やディベートを行う。

第6回 研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：日本の経営理念なので、これについての質問やディベートを行う。

第7回 研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：金融市場の変遷と証券会社・銀行の業務内容の違いなので、これについての質問やディベートを行う。

第8回 研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：日本政府の負債と保有資産なので、これについての質問やディベートを行う。

第9回 研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：日本企業のキャッシュ・フローなので、これについての質問や

ディベートを行う。

第10回 研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：日本国内における個人保有の資産なので、これについての質問やディベートを行う。

第11回 研究の大枠のテーマ：日本経済・社会の現状と今後の課題、小テーマ：政府のあり方・経済政策・福祉政策なので、これについての質問やディベートを行う。

第12回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：2008年リーマンショック後の財政と税の問題なので、これについての質問やディベートを行う。

第13回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：金融と直接投資なので、これについての質問やディベートを行う。

第14回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：資本移動と多国籍企業の活躍、労働市場の流動化なので、これについての質問やディベートを行う。

第15回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：GDP・市場規模と国民生活なので、これについての質問やディベートを行う。

第16回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：通貨と貿易、ベーシックインカム論なので、これについての質問やディベートを行う。

第17回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：経済成長と金価格、不動産価格との関連なので、これについての質問やディベートを行う。

第18回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：国家資本主義と私有財産制なので、これについての質問やディベートを行う。

第19回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：資本主義の長短と民主主義システムとの兼ね合いなので、これについての質問やディベートを行う。

第20回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：金融危機と経済危機との関連なので、これについての質問やディベートを行う。

第21回 研究の大枠のテーマ：世界経済全般についての課題、小テーマ：イノベーションによる既存の国家体制への揺さぶりなので、これについての質問やディベートを行う。

第22回 研究の大枠のテーマ：アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題、小テーマ：各地域の安全保障体制と経済の特徴、人口問題なので、これについての質問やディベートを行う。

第23回 研究の大枠のテーマ：アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題、小テーマ：朝鮮半島情勢の推移と中国の地域覇権国化なので、これについての質問やディベートを行う。

第24回 研究の大枠のテーマ：アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題、小テーマ：人口増大と投資活動の活発化なので、これについての質問やディベートを行う。

第25回 研究の大枠のテーマ：アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題、小テーマ：環境問題（地球温暖化）と経済成長、CO2回収技術の向上なので、これについての質問やディベートを行う。

第26回 研究の大枠のテーマ：アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題、小テーマ：日本企業の持つ素材技術、省エネ技術が東アジアの発展の問題点を解決するヒントとなる点なので、これについての質問やディベートを行う。

第27回 研究の大枠のテーマ：アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題、小テーマ：増大する人口とインフラ投資なので、これについての質問やディベートを行う。

第28回 研究の大枠のテーマ：アジア経済（東アジア・東南アジア・南アジアの各地域経済）の課題、小テーマ：アジアの歴史と文化について知り、これと日本の歴史との関わり合いについての検討なので、これについての質問やディベートを行う。

第29回 研究の大枠のテーマ：国際経済全般の将来像についての予測が出来るかどうかであり、小テーマ：世界人口の推移、各国GDPの推移、地域覇権国の入れ替わり、政治システムの変化、農業へのバイオテクノロジーの導入、生産性革命、エネルギー革命なので、これについてディベートを行う。

第30回 研究の大枠のテーマ：国際経済全般の将来像についての予測が出来るかどうかであり、小テーマ：AI化と自動化、農業の工業化・自動化と生産性の向上、自動化と社会システムの変化、既存の政治システムの行き詰まり、社会の中における人間関係の変化、家族観の変化、労働に対する価値観の変化なので、これについてディベートを行う。

授業外学習

通年で2単位の演習科目なので、予習・復習は必要ないが、授業方法がディベートを中心とするので、普段から国際問題や国内の時事問題に対する感度を高め、諸問題に対する自分の視点を持つよう努力する必要がある。

教科書

授業内で指示する。

参考書

授業内で指示する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 権純珍

授業の概要

・修士課程レベルの国際資本(金融)市場論を講義する。国際資本市場の理論及び分析手法を身につけると共に、最近の国際金融問題へと事例を展開しながら講義を進行する。

到達目標

- 1 国際資本(金融)市場の理論体系を理解できる。
- 2 金融市場の効率性についての分析能力を習得する。
- 3 金融市場のグローバル化に対応できる能力を身につける。

評価方法

・授業に取り組む姿勢（授業中の討議への参加を含む）（40％）、前後期に課すレポート（60％）等で総合的に評価する。

注意事項

- ・学習内容を十分に予習及び復習することが必要である。
- ・学部レベルの金融論・国際経済学・国際金融論及び経済数学の知識、英語読解力を持つこと。

授業計画

- 第1回 国際資本市場研究の概要
- 第2回 国際資本市場の仕組み
- 第3回 国際資本市場の役割とその機能
- 第4回 国際収支とGDP
- 第5回 国際収支と資本移動
- 第6回 外国為替市場(1)(外国為替の仕組み)
- 第7回 外国為替市場(2)(市場の仕組みと機能)
- 第8回 外国為替市場(3)(為替取引と為替レート)
- 第9回 為替レートと国際収支(経常収支)
- 第10回 為替レートの決定理論(1)(基本の考え方)
- 第11回 為替レートの決定理論(2)(購買力平価)
- 第12回 為替レートの決定理論(3)(金利平価)
- 第13回 為替レートの決定理論(4)(金融リスク)
- 第14回 為替レートの決定理論(4)(為替リスク)
- 第15回 中間まとめ（レポートの講評を含む）
- 第16回 外国為替市場の均衡(1)(短期)
- 第17回 外国為替市場の均衡(2)(長期)
- 第18回 外国為替市場の効率性(1)(為替の変化率)
- 第19回 外国為替市場の効率性(2)(市場の効率性)
- 第20回 外国為替介入とその効果(1)(仕組み)
- 第21回 外国為替介入とその効果(2)(介入方法)
- 第22回 外国為替介入とその効果(3)(介入効果)
- 第23回 マンデル＝フレミング・モデル(1)
- 第24回 マンデル＝フレミング・モデル(2)
- 第25回 金融当局の為替政策効果(1)(財政政策)
- 第26回 金融当局の為替政策効果(2)(金融政策)
- 第27回 国際資本移動(1)(メカニズム)

第28回 国際資本移動(2)(現状)

第29回 通貨統合

第30回 総まとめ（レポートの講評を含む）

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間

- ・中級レベルの金融論・国際経済学・国際金融論・ミクロ経済学・マクロ経済学やその関連文献を読み、自学自習すること。
 - ・前後期にそれぞれ1つのレポートを課すので、平素から授業の予習・復習をしておくこと。
-

教科書

- ・特に指定しない。
 - ・必要に応じて関連文献および統計資料等を配布する。
-

参考書

- ・参考書等は必要に応じて随時、授業中に指示する。
-

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4. 0 単位
担当教員	後藤裕

授業の概要

「ソリューション」とは問題解決学の意味であり、ビジネスとは問題発見問題解決を実施し、業績を向上させることである。現実の企業再生の経験を踏まえ、企業経営でも実施されている、問題発見方法、問題解決方法を科学的に論じ、「問題とは何か」ということを浮き彫りする。【アクティブ・ラーニング】「課題解決学習」、「演習」、「ライティング」を取り入れている。【フィードバック】レポート作成。提出後、各自がレポートを発表し担当教員との質疑応答を通じて能力のレベルアップを図ることを義務づける。

到達目標

- （１）「問題発見」の理念と実例を学ぶ。
- （２）「問題解決」の理念と実例を学ぶ。
- （３）問題解決の方法を示したレポートを作成する。

評価方法

受講態度：評価割合 6 0 %（到達目標：（１）、（２）を確認）

レポート作成：評価割合 4 0 %（到達目標：（３）を確認）

注意事項

なし

授業計画

前期集中期間

第 1 回～3 回：「問題」とは「あるべき姿」と「現状」とのギャップと定義し、「問題」が明確になれば、解決策の精度が向上する。

第 4 回～6 回：現状認識の分析力が低いと、問題を短絡的に捉えがちになり、問題の本質を見失う。

第 7 回～9 回：戦略的問題発見力の 4 P とその相互作用。

第 1 0 回～1 2 回：仮設思考で分析の意味合いを導き出すが、定量分析と定性分析を併用する。

第 1 3 回～1 5 回：MECE（ミッシー）、トレンド分析、差異分析を学ぶ。

後期集中期間

第 1 6 回～1 8 回：集中・分散分析、付加価値分析（コスト分析）、CS・CE分析を学ぶ。

第 1 9 回～2 1 回：ロジック分析、コーザリティ分析、相関分析を学ぶ。

第 2 2 回～2 4 回：シェア分析、感度分析、パレート分析、を学ぶ。

第 2 5 回～2 7 回：ABC分析、ピーク分析、リスク・期待分析を学ぶ。

第 2 8 回～3 0 回：仮設発想法とロジックツリーの概要を学び、実習を通じて理解を深める。期末レポートを作成する。

授業外学習

第 1 回～第 3 回：予習として、現状とあるべき姿を理解する。復習として、自分の本当にあるべき姿を考える。（標準学習時間 6 時間）

第 4 回～第 6 回：予習として、「現状認識分析の低さ」理解する。復習として、「問題の本質」を理解する。（標準学習時間 6 時間）

第 7 回～第 9 回：予習として、戦略的問題発見とは何かを理解する。復習として、問題発見の 4 P の相互作用を理解する（標準学習時間 6 時間）。

第 1 0 回～第 1 2 回：予習として、仮設発想法とは何かを理解する。復習として、分析の目的を理解する。（標準学習時間 6 時間）

第 1 3 回～第 1 5 回：MECE(ミッシー)とは何かを理解する。復習として、トレンド分析と差異分析を活用して分析力を高める事を理解する。（標準学習時間 6 時間）

第 1 6 回～第 1 8 回：予習として付加価値分析（コスト分析）は何かと理解する。復習として、企業業績の分析方法として、付加価値分析、集中・分散分析、CS・CE分析の活用方法を理解する。（標準学習時間 6 時間）

第 1 9 回～第 2 1 回：ロジック分析、コーザリティ分析、相関分析を理解する。復習として、企業の業績分析にどのように活用されているか、

理解する。（標準学習時間 6 時間）

第 2 2 回～2 4 回：予習として、シェア分析、感動分析、パレート分析を理解する。復習として、企業の業績分析での活用方法を理解しておく。（標準学習時間 6 時間）

第 2 5 回～第 2 7 回：ABC 分析、ピーク分析、リスク・期待分析を理解する。復習として、ABC 分析,ピーク分析、リスク・期待分析の活用例を理解する。（標準学習時間 6 時間）

第 2 8 回～第 3 0 回：MECE（ミッシー）とロジックツリーの分析の違いから、問題解決方法を理解する。演習を通じて、問題発見方法と問題解決方法の実務を理解する。（上記の行なった標準学習時間の合計は120時間必要。）

教科書

問題発見プロフェッショナル ― 構想力と分析力 ― 斎藤嘉則 著

問題解決プロフェッショナル ― 思考と技術 ― 斎藤嘉則 著

参考書

講義中に提示する。

備考

運動処方の研究（HHM17）

通年

Research on exercise prescription

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	👤 猪木原孝二

授業の概要

運動処方の実際について教授する。特に年齢・性差の違いによる注意事項について解説し、対象者に応じた運動処方（トレーニング、運動の種類）、メディカルチェック等の判断について理解を深める。

到達目標

個人・年齢・性差における運動処方の実際について把握する力を身につける。

評価方法

授業に取り組む姿勢（20％）およびレポート（80％）で評価する。

注意事項

特になし

授業計画

- 1．オリエンテーション
- 2．運動処方とは
- 3～4．身体計測・体力診断の方法
- 5～6．メディカルチェックの必要性について
- 7～8．性差における運動処方について－その1－
- 9～10．性差における運動処方について－その2－
- 11～12．個人にあった運動強度について－その1－
- 13～14．個人にあった運動頻度について－その2－
- 15～16．個人にあった運動時間について－その3－
- 17～18．年齢と運動処方－その1－
- 19～20．年齢と運動処方－その2－
- 21～22．運動種目の選択について
- 23～24．安全対策について
- 25～26．コンディショニングについて
- 27～29．課題レポートの指導
- 30．課題レポートの提出

授業外学習

授業外学習の具体的な内容や方法については、授業中に詳しく指示する。

教科書

使用しない。

参考書

使用しない

備考

生活習慣病予防の研究（HHM20）

通年

Research on lifestyle-related diseases prevention

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 吉田悦男

授業の概要

生活習慣病の概念、成因、発症機序、症状、治療法について理解する。さらに危険因子の関連機序を検討し、生活習慣病の発症予防、進行抑制の可能性について理解を深め、研究方法などを学ぶ。

到達目標

生活習慣病に関して幅広い知識を身につけ他者に詳しく説明できる。

評価方法

発表 7 0 %、討論参加 3 0 %として総合評価する。

注意事項

自ら資料を探し出す能力も高めてもらいたい。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	成人病から生活習慣病への変遷
第3回	生活習慣病の実態 1 虚血性心疾患
第4回	生活習慣病の実態 2 脳卒中
第5回	生活習慣病の実態 3 がん
第6回	生活習慣病の実態 4 糖尿病
第7回	生活習慣と危険因子 1 高脂血症
第8回	生活習慣と危険因子 2 高血圧
第9回	生活習慣と危険因子 3 喫煙
第10回	生活習慣と危険因子 4 動脈硬化
第11回	生活習慣と危険因子 5 糖尿病の血管障害
第12回	生活習慣と危険因子 6 肥満と循環器合併症
第13回	Multiple risk factors
第14回	高血圧と生活習慣 1
第15回	高血圧と生活習慣 2 食塩
第16回	高血圧と生活習慣 3 肥満
第17回	高血圧と生活習慣 4 運動
第18回	高血圧と生活習慣 5 アルコール
第19回	高血圧と生活習慣 6 ストレス

回数	内容
第20回	高血圧と生活習慣 7 電解質
第21回	動脈硬化と生活習慣 1 食事
第22回	動脈硬化と生活習慣 2 肥満
第23回	動脈硬化と生活習慣 3 運動
第24回	動脈硬化と生活習慣 4 タバコ
第25回	糖尿病と生活習慣 1 インスリン抵抗性
第26回	糖尿病と生活習慣 2 血管合併症
第27回	糖尿病と生活習慣 3 非薬物療法
第28回	糖尿病と生活習慣 4 患者教育
第29回	今後の展望
第30回	総括質疑

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間

毎回討論のための予備学習をしておくこと。最新の英語論文を国際ジャーナルから自ら検索、入手し読解、吟味しておく。

教科書

使用しない。

参考書

参考文献は、適宜案内する。

備考

生活習慣病予防実験（HHM21）

通年

Experiment of lifestyle-related diseases prevention

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 吉田悦男

授業の概要

生活習慣病予防には多岐にわたるアプローチが存在する。それぞれのアプローチにおける考え方、研究手法を知り、いかなる知見が得られているかを検討する。さらに生活習慣病の成因、発症機序を理解したうえで、理論に基づく効果的予防法を考案し、自らその方法を実践し、その過程、効果を検証する。

到達目標

生活習慣病の予防に関して他者に説明でき、さらに自分の意見も言えるレベルの力を身につける。

評価方法

発表（70％）、討論参加（30％）として総合評価する。

注意事項

自ら資料を探し出す能力も高めてもらいたい。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	生活習慣病の概要
第3回	生活習慣病発症機序 1 総論
第4回	生活習慣病発症機序 2 肥満
第5回	生活習慣病発症機序 3 高脂血症
第6回	生活習慣病発症機序 4 高血圧
第7回	生活習慣病発症機序 5 高血糖
第8回	生活習慣病発症機序 6 動脈硬化
第9回	生活習慣病発症機序 7 がん
第10回	生活習慣病発症機序 8 歯周病
第11回	生活習慣病発症機序 9 糖尿病
第12回	死の四重奏
第13回	生活習慣病予防法の現状 1 食塩と高血圧
第14回	生活習慣病予防法の現状 2 肥満と減量
第15回	生活習慣病予防法の現状 3 運動と高血圧
第16回	生活習慣病予防法の現状 4 アルコール摂取と血圧
第17回	生活習慣病予防法の現状 5 食事と脂質
第18回	生活習慣病予防法の現状 6 肥満と動脈硬化

回数	内容
第19回	生活習慣病予防法の現状 7 運動と脂質
第20回	生活習慣病予防法の現状 8 喫煙と動脈硬化
第21回	生活習慣病予防法の考案 1 血圧関連 1
第22回	生活習慣病予防法の考案 2 血圧関連 2
第23回	生活習慣病予防法の考案 3 脂質改善 1
第24回	生活習慣病予防法の考案 4 脂質改善 2
第25回	生活習慣病予防法の考案 5 糖尿病予防 1
第26回	生活習慣病予防法の考案 6 糖尿病予防 2
第27回	生活習慣病予防法の考案 7 患者教育 1
第28回	生活習慣病予防法の考案 8 患者教育 2
第29回	今後の展望
第30回	総括質疑

授業外学習

学習時間の目安：合計30時間

毎回討論のための予備学習をしておくこと。最新の英語論文を国際ジャーナルから自ら検索、入手し読解、吟味しておく。

教科書

使用しない。

参考書

参考文献は適宜案内する。

備考

健康と食生活の研究（HHM22）

通年

Research on Health and Eating habits

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 矢田貝智恵子

授業の概要

運動と休養とともに健康の概念を考える上でなくてはならない食事の重要性について、食環境・食形態・疾病構造・保健医療福祉制度の変化といった「食」を取り巻く諸問題とともに理解する。その上で、食生活や生活習慣がもたらす健康との関連などを学ぶ。
健康分野の高度な専門知識を身につけ、健康生活に関する様々な問題点を、学術的な立場に立って解決できる人材の育成を目指す。

到達目標

- 健康と食生活と食の意義について理解し、説明できる。
- 「食」を取り巻く諸問題を自らの問題としてとらえ、自分に合った食生活や生活習慣を実践することができる。

評価方法

レポート70%（到達目標1、2）、プレゼンテーションおよび口頭試問30%（到達目標1）に基づき総合的に評価する。

注意事項

栄養学の基礎知識が必要。

授業計画

回数	内容
第1回	講義の概要
第2回	環境と食生活 1 農と食
第3回	環境と食生活 2 健康と食
第4回	環境と食生活 3 生活習慣と食
第5回	文献購読
第6回	文献購読
第7回	レポート提出：環境と食生活
第8回	健康と環境 1 栄養素と健康
第9回	健康と環境 2 ライフステージ
第10回	健康と環境 3 長寿社会
第11回	健康と環境 4 運動栄養
第12回	健康と環境 5 スポーツ栄養
第13回	健康と環境 6 サプリメント
第14回	文献購読
第15回	文献購読
第16回	文献購読
第17回	レポート提出：健康と環境
第18回	国民の健康と国の政策

回数	内容
第19回	疾患と食品の機能性 1 高血圧
第20回	疾患と食品の機能性 2 免疫・アレルギー
第21回	疾患と食品の機能性 3 糖尿病
第22回	疾患と食品の機能性 4 循環器疾患
第23回	疾患と食品の機能性 5 骨粗鬆症
第24回	疾患と食品の機能性 6 肥満
第25回	文献購読
第26回	文献購読
第27回	文献購読
第28回	レポート提出：疾患と食品の機能性
第29回	食習慣の展望
第30回	プレゼンテーションおよび口頭試問

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間

関連する情報を得るため、学内外の図書館などを利用し、文献収集を行うなど、課題レポート作成に取り組む。

教科書

「食品機能学への招待－生活習慣病予防と機能性食品－」・須見洋行、矢田貝智恵子・三共出版・ISBN978-4-7827-0685-5

参考書

「食Up to Date―食と健康|食と安全|食と環境」・松田寛・金芳堂・ISBN978-4-7653-1167-0

上記以外の参考書については、適宜紹介する。

備考

年次	1 年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 矢田貝智恵子

授業の概要

健康管理に関わる基本的な機器の操作、測定方法、データ解析方法を習得し、定期的に計測することで、自己の健康管理、身体づくりを行う。

健康増進・スポーツ時などにおける健康管理の方法などを調査、分析し、その結果に基づいて実験・研究計画の立案、実施、評価、判定を行う能力を養う。

健康分野の高度な専門知識と技能を身につけ、健康生活に関する様々な問題点を、学術的な立場に立って解決できる人材の育成を目指す。

到達目標

- 1 体成分分析や骨密度測定などの操作ができ、結果説明ができる。
- 2 日常生活の中で自己の健康状態を把握するにはどのようにするかを理解し、説明できる。
- 3 健康増進・スポーツ時などにおける健康管理の方法を学び、説明できる。
- 4 健康管理について、調査・分析し、その結果に基づいて実験・研究計画の立案、実施、評価、判定を行うことができる。

評価方法

機器操作20%（到達目標1）、分析結果の判定および評価30%（到達目標2～4）、レポート50%（到達目標4）に基づいて総合的に評価する。

注意事項

- ・講義「食生活と健康の研究」を履修のこと。
- ・定期的に進捗状況を報告すること。

授業計画

- 第1週 オリエンテーション
- 第2週 体成分分析装置の説明および機器操作
- 第3週 体成分分析の結果および評価
- 第4週 ディスカッションおよびレポート提出
- 第5週 骨密度測定機器の説明および機器操作
- 第6週 骨密度測定結果および評価
- 第7週 ディスカッションおよびレポート提出
- 第8週 血液成分分析機器の説明および機器操作
- 第9週 血液成分分析結果および評価
- 第10週 ディスカッションおよびレポート提出
- 第11週～第14週 テーマと調査・実験方法の設定
- 第15週～第25週 調査・実験および文献講読
- 第26週～第29週 実験・研究のまとめおよびレポート作成
- 第30週 レポート提出およびディスカッション

授業外学習

- 学習時間の目安：合計120時間
- ・定期的に体成分分析を行い、毎日の生活の中で、健康の維持増進のための事項を実践する。
 - ・関連する情報を得るため、学内外の図書館などを利用し、文献収集を行うなど、レポート作成に取り組む。

教科書

なし

参考書

適宜紹介・配布する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 湯川尚一郎

授業の概要

人間と動物の健康生活は、自然環境(空気、水、土壌等)や生活環境(水道、生活污水、ごみ、人 間と動物の食生活等)と大きく関わっている。すなわち、健康の成り立ちを生活レベルから多要因的に理解し、人間と動物の両方に関する健康生活のために考え、行動することができるように、考え方や知識を修得する。とくに重視する事項は健康事象の疫学的理解・人間と環境の相互作用の理解ならびに人間と動物が共生する衣食住の重要性の理解である。

到達目標

1. 人と動物の健康の成り立ちを生活レベルから多要因的に理解し説明できるようになる。
2. 個人および地域の人々の健康生活のために考え、行動することができるように、考え方や知識および技術を修得する。

評価方法

小項目ごとにその内容を提出させるとともに、大項目ごとに課題を与え理解度をチェックする。そして、提出物の配点40％（達成目標1, 2を評価）、理解度チェックのための大項目ごとのレポート（達成目標1, 2を評価）を基に最終評価を行う。

注意事項

- ・公衆衛生学は極めて包括的、学際的かつ集学的な学問体系であるため、関連した諸科学の学習が重要である。
- ・公衆衛生学には医学・医療の社会的適用という側面があるため、日頃から総合性、社会性、現実性、即時性を養うよう心がけること。

授業計画

- 1 週目:オリエンテーション
- 2 週目:公衆衛生学序論 疾病予防の考え方 3 週目:疫学とは
- 4 週目:健康/疾病の成り立ちの疫学的理解 5 週目:疾病量の把握
- 6 週目:疫学の方法(1)記述疫学
- 7 週目:疫学の方法(2)分析疫学
- 8 週目:人間の環境
- 9 週目:環境の把握とその評価
- 10 週目:空気の衛生と大気汚染(1) 汚染の実態
- 11 週目:空気の衛生と大気汚染(2) 汚染対策
- 12 週目:水の衛生と水質汚濁(1) 上水道
- 13 週目:水の衛生と水質汚濁(2) 下水道とその他
- 14 週目:衣食住の衛生
- 15 週目:廃棄物と環境汚染
- 16 週目:公害と地球環境問題
- 17 週目:企業の安全衛生のしくみ(1) ISO
- 18 週目:企業の安全衛生のしくみ(2) HACCP
- 19 週目:人と動物を取り巻く環境問題(1) 畜産動物における諸問題
- 20 週目:人と動物を取り巻く環境問題(2) 野生動物における諸問題
- 21 週目:人と動物を取り巻く環境問題(3) 伴侶動物における諸問題
- 22 週目:人における喫煙行動の影響(1) 能動喫煙による影響
- 23 週目:人における喫煙行動の影響(2) 受動喫煙による影響
- 24 週目:動物における受動喫煙の影響(1) 能動喫煙による影響
- 25 週目:動物における受動喫煙の影響(2) 受動喫煙による影響
- 26 週目:動物用フードに関する諸問題(1) 海外における諸問題
- 27 週目:動物用フードに関する諸問題(2) 国内における諸問題

28 週目:動物用トリーツに関する諸問題(1) 海外における諸問題

29 週目:動物用トリーツに関する諸問題(2) 国内における諸問題

30 週目:まとめ

授業外学習

学習時間の目安：120時間

予習：教科書の該当ページを読んで概略を掴む。

復習：過去の文献を探し、読むことで学びの内容を深めるようにすること。

教科書

職場の健康がみえる 産業保健の基礎と健康経営 | 泉 博之ら監修 | メディックメディア社 | ISBN978-4-89632-782-3

公衆衛生がみえる 2018-2019 | 石川 雅俊ら監修 | メディックメディア社 | ISBN978-4-89632-687-1

参考書

環境白書2019（環境省），国民衛生の動向2019/2020（厚生労働統計協会）

備考

年次	1年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	2. 0単位
担当教員	湯川尚一郎

授業の概要

人と動物の健康生活は、自然環境（空気、水、土壌等）や生活環境（水道、生活污水、ごみ、食生活等）・労働環境（化学物質・騒音等有害因子の曝露等）あるいは社会環境（健康施策・保健医療福祉制度等）と大きく関わっている。すなわち、健康の成り立ちは“環境との相互作用”であるという理解の下、人と動物が健康に生活していく上での阻害要因や促進要因に関して各自関心のあるテーマを取り上げ、「問題の発見」→「情報の収集」→「仮説の設定」→「仮説の検証」→「レポート作成」の過程を実践する。

到達目標

1. 各自関心のあるテーマを取り上げ、「問題の発見」→「情報の収集」→「仮説の設定」→「仮説の検証」→「レポート作成」の過程を実践し、科学的根拠に基づいたレポートにまとめ、科学的思考態度を修得する。

評価方法

進捗状況を提出物でチェックし、最終的に提出されたレポートを基に評価を行う。提出物の配点40%（達成目標1を評価）、レポート（達成目標1を評価）を基に最終評価を行う。

注意事項

レポート作成にあたって、先行研究を十分把握した上で取り掛かること。

授業計画

【テーマの設定（仮説の設定）】

- 1週目：文献等の収集（1）医中誌を中心に
- 2週目：文献等の収集（2）pubmedを中心に
- 3週目：現状の把握（1）国内文献から
- 4週目：現状の把握（2）海外文献から
- 5週目：問題点の整理
- 6週目：目的の明確化
- 7週目：各種細胞の培養法の習得
- 8週目：仮説の設定

【仮説の検証】

- 9週目：対象・方法の検討（1）過去の文献から
- 10週目：対象・方法の検討（2）本学の設備から
- 11週目：対象・方法の検討（3）対応可能な方法の提案
- 12週目：実験への準備（1）機器備品の確認
- 13週目：実験への準備（2）消耗品等の確認
- 14週目：実験（1）実験機材の安全確認
- 15週目：実験（2）実験機材の使用準備
- 16週目：実験（3）消耗品の準備・作成
- 17週目：実験（4）愛玩動物用飼料等の検査法・選択培養まで
- 18週目：実験（5）愛玩動物用飼料等の検査法・分離培養まで
- 19週目：実験（6）愛玩動物用飼料等の検査法・菌種同定まで
- 20週目：実験（7）BAM法・選択培養まで
- 21週目：実験（8）BAM法・分離培養まで
- 22週目：実験（9）BAM法・菌種同定まで
- 23週目：実験（10）遺伝子検査・同定菌の保存

【レポート作成・提出】

24週目：データの整理（1）同定菌の確認

25週目：データの整理（2）遺伝子検査

26週目：データの整理（3）BLAST等データベースとの照合

27週目：データの整理（4）MLST等データベースとの照合

28週目：レポート作成（1）菌種について

29週目：レポート作成（2）遺伝子検査について

30週目：レポート校正・提出

授業外学習

学習時間の目安：30時間

予習：教科書の該当ページを読んで概略を掴む。

復習：過去の文献を探し、読むことで学びの内容を深めるようにすること。

進捗状況の報告を求めるので、整理しておくこと。

教科書

職場の健康がみえる 産業保健の基礎と健康経営 | 泉 博之ら監修 | メディックメディア社 | ISBN978-4-89632-782-3

公衆衛生がみえる 2018-2019 | 石川 雅俊ら監修 | メディックメディア社 | ISBN978-4-89632-687-1

参考書

適宜指示する

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4． 0 単位
担当教員	 内藤 整

授業の概要

植物は地球上のあらゆる地域の環境に適応し、人間はその地域の植物の持つ機能を活用し、必要な生活資材を生産しながら生きている。今日では、人口の爆発的増加と急激な環境変化を背景にして、地域の農業生産をいかに維持するかが世界規模での極めて重要な課題となっている。この講義では、植物機能とそれを利用した食糧生産について説明し、環境ストレスとそれを克服するための育種が食糧生産に大きく関わっていることを解説する。

到達目標

- 1.持続的農業生産の維持が人間生活や地域社会の安定に不可欠であることを理解し、生産性と持続性を兼ね備えた農業の大切さを説明できる。
- 2.専門分野の英語を理解できる。

評価方法

受講態度などの平常点30％（到達目標1,2を評価）と提出物・レポート70％（到達目標1,2を評価）により評価を行う。

注意事項

特になし

授業計画

はじめに（講義の概要）

人口増加 P1～24

農業システム 1．植物と食料 P25～29

農業システム 2．気候・気象と食糧生産 P30～40

農業システム 3．農業の集約化 P41～51

農業システム 4．生産性と持続性 P52～57

植物の成長と発達 1．細胞 P122～124

植物の成長と発達 2．組織 P124～127

植物の成長と発達 3．器官 P127～131

植物の成長と発達 4．子実形成 P131～136

植物の成長と発達 5．植物ホルモン P145～156

植物の成長と発達 6．生殖成長 P156～161

植物の成長と発達 7．光エネルギーの役割 P162～163

植物の成長と発達 8．光合成 P163～171

植物の成長と発達 9．物質分配 P171～177

植物の成長と発達 10．呼吸 P177～186

植物育種と遺伝子工学 1．進化論 P240～245

植物育種と遺伝子工学 2．遺伝的変異 P245～247

植物育種と遺伝子工学 3．DNA P247～251

植物育種と遺伝子工学 4．RNAとタンパク合成 P251～259

植物育種と遺伝子工学 5．遺伝子組み換えによる植物育種 P259～262

作物の改良 1．選抜 P263～264

作物の改良 2．作物の栽培化 P264～276

作物の改良 3．農業革命 P276～280

作物の改良 4．農業の近代化と現代科学 P280～287

作物の改良 5．交雑 P287～289

作物の改良 6．突然変異 P290～297

作物の改良 7. 緑の革命 P298～311

作物の改良 8. 遺伝資源 P311～327

まとめ レポート「将来の農業のあるべき姿について」

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間

- ・予習として、英語テキストの授業計画に示した範囲を訳しておくこと（毎回2時間）。
 - ・復習として参考書などを読み、各項目の理解を深めること（毎回1時間）。
 - ・毎回の講義内容を要約し、提出する（毎回1時間）。
 - ・レポート「将来の農業のあるべき姿について」（10時間）
-

教科書

M.J.Chrispeels and D.E.Sadava「Plants, Genes, and Agriculture」 Jones and Bartlett Publishers

参考書

森田茂紀他編著「栽培学-環境と持続的農業-」朝倉書店、武田和義著「植物遺伝育種学」裳華房、石井龍一編「植物生産生理学」朝倉書店、堀江武他著「作物学総論」朝倉書店、清水碩著「大学の生物学 植物生理学」裳華房、など講義中に適宜案内する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 内藤 整

授業の概要

太陽エネルギーを固定して有機物を産出する耕地はソーラーパネルの働きをしている。そのために人間が利用している植物が作物であり、人間の生命・生活を支えている。人口増加と気候変動によって食糧不足が懸念される今日では、様々な地域環境の中で十分に作物の機能を発揮させることが重要である。この実験では植物の機能を解明するため、材料の育成方法や機能測定方法について学ぶ。

到達目標

- 1.各自が取り上げた課題についての研究論文を探して入手できる。
- 2.実験植物を栽培・管理できる。
- 3.植物の生育や収量を測定し、その原因を明らかにできる。

評価方法

受講態度などの平常点40%（到達目標2を評価）とレポート60%（到達目標1,3を評価）により評価を行う。

注意事項

動きやすく安全な服装で受講すること。

授業計画

実験上の注意

実験計画の策定

文献調査と議論（1）図書館の利用

文献調査と議論（2）インターネット検索

文献調査と議論（3）論文紹介

実験植物の育成（1）種子予措

実験植物の育成（2）土壌準備

実験植物の育成（3）播種

実験植物の育成（4）培養液の作成

生育調査 実験レポート「イネの成長解析」

光合成の測定

光合成色素の定量 実験レポート「異なる培養液濃度で育成したイネのクロロフィル含量」

受光日射量の推定

収量調査 1.草丈と乾物重

収量調査 2.1 株穂数と1 穂粒数

収量調査 3.粒収量と千粒重 実験レポート「異なる圃場で生育するイネの収量比較」

フィールド調査（1）自然観察

フィールド調査（2）植物生態

フィールド調査（3）植物の生育環境

フィールド調査（4）植物の発育

フィールド調査（5）開花結実

植物成分分析（1）粉碎と秤量

植物成分分析（2）灰化

植物成分分析（3）イオンクロマトグラフィーによる陽イオン測定

植物成分分析（3）イオンクロマトグラフィーによる陰イオン測定

植物の形態調査（1）光学顕微鏡を用いた組織観察

植物の形態調査（2）気孔密度の測定

植物の形態調査（3）走査電子顕微鏡観察
植物の形態調査（4）画像解析による根系調査
実験結果の発表

授業外学習

- ・文献調査を行って現状の課題を整理する（5時間）。
 - ・植物の栽培管理を行い、植物に対する観察眼を養う（10時間）。
 - ・実験の内容を記録し、レポートにまとめる（5時間×3課題）。
-

教科書

使用しない。

参考書

北條良夫他編「最新作物生理実験法」農業技術協会、東京大学大学院農学生命科学研究科生産・環境生物学専攻編「〔実験〕生産環境生物学」朝倉書店他、適宜案内する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 川添敏弘

授業の概要

「環境」という枠組みは広いが、大きく「人的環境」と「物的環境」に分けることができる。そして、この科目ではこの2つの領域が重なり合う部分に重点をおいた授業を展開していく。キーワードとして「心理学」「動物行動学」「幼児教育」「障害者福祉」「高齢者福祉」をESD（持続可能な開発のための教育）やSDGs（持続可能な開発目標）を意識しながら学習していく。授業の一部は学外で実施する予定である。

【アクティブラーニング】ワークショップやアクティブラーニング形式で実施する。

到達目標

1. グローバルな視点で環境や生命を語ることができる。
2. 身近な環境や生命に対して高い問題意識を持てる。
3. 様々な地域活動を理解し、行動するための知識や技能を獲得する。

評価方法

出席状況や授業内でのディスカッションにおける積極性（40%）、レポートの提出状況と内容（60%）により成績を評価し（到達目標 1 ～ 3 を評価）、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

- ・グローバルな視点と身近な環境の両方の内容で実施する。
- ・学外での教育活動を実施する際、土日になる場合がある。
- ・各授業は関連性が薄い場合もあるが、最終的に体系的に捉えることができるようにしていく。
- ・ワークショップやアクティブラーニング形式で実施するので、人前で発言することが苦手な学生は事前に相談に来ること。

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 子どもの発達と環境（総論）

第3回 子どもの発達と環境（屋内あそび）

第4回 子どもの発達と環境（飼育活動）

第5回 子どもの発達と環境（栽培活動）

第6回 ビオトープとかいぼり

第7回 外来生物による環境破壊

第8回 環境破壊への取り組みとESD・SDGs

第9回 紫外線の影響とヒトへの影響

第10回 地球環境破壊による動物への影響

第11回 飽食文化とベジタリアン

第12回 資本主義経済と貧困問題、環境破壊

第13回 ディスカッション（子どもから預かっている環境）

第14回 学習理論（単一学習と連合学習）

第15回 学習理論（シェイピング・系統的脱感作）

第16回 イヌの育て方（訓練）

第17回 発達障害者への動物介在介入事例

第18回 動物介在介入の理論

第19回 精神疾患患者の症状と関わり方

第20回 不登校と子どもの支援（箱庭・アサーション・コラージュ）

第21回 教室内での子どもの支援（対人関係ゲーム・エンカウンター）

第22回 身体障害者への支援のあり方と補助犬

第23回 バリアフリーという環境について考える（体験学習）

第24回 高齢者施設での動物介在活動

第25回 認知症の症状とのコミュニケーション法

第26回 カウンセリングとその技術

第27回 心理テストによる自己分析

第28回 芸術療法による自己分析

第29回 地域マルシェを創ってみよう1（アイデア）

第30回 地域マルシェを創ってみよう2（発表）

授業外学習

- ・メディアからの情報を娯楽として眺めるのではなく、授業で学んだことと結び付けて考えるようにする。
- ・実際にボランティアや地域イベントに参加することで、地域環境や生命について考える機会とする。
- ・授業内で各項目についてディスカッションができるよう、予習により自分の考えを持てるように事前準備する。

教科書

特に指定しない

参考書

知りたい！やってみたい！アニマルセラピー2016（駿河台出版社）

備考

年次	1 年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 川添敏弘

授業の概要

人間動物関係学のテーマに深く取り組んでいくことを目標とする。

人間動物関係学は分野をまたがり、融合し、新たな分野がつくられてきた。本授業でも、医学、心理学、福祉学、動物行動学、社会福祉学、地域コミュニティ学などについて幅広く学んでいく。講義ではワークショップやアクティビティを行いながら実施していく。振り返りの中で多様な環境の重要性を理解し、他者を支援することや地域連携を行う力を身に付けていく

この演習では、特に「ドッグトレーニング」と「動物介在介入」について学びながら科学的視点を持った知識を身に付けていく。

到達目標

人間動物関係学に関するテーマを研究視点でみることができるようになる。

1. 地域を取り巻く社会福祉における課題を理解する
2. 子どもに必要な環境を理解する
3. 自分のことを理解する
4. 地域活動を理解する
5. 地域活動の立案、計画ができるようになる

評価方法

講義時の討論や質疑応答（30％）、レポート（40％）、プレゼン内容（30％）により成績を評価し（到達目標1～5を評価）、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

環境と生命について広く理解していくことを目標とする。

講義でのワークショップ等に積極的に参加すること。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 高齢者施設での傾聴ボランティア
3. アニマルセラピーの始め方
4. イヌのハンドリング
5. 犬のトレーニング（基礎）
6. 犬のトレーニング（散歩）
7. 犬のトレーニング（問題行動の制御）
8. 犬のトレーニング（拮抗条件付け）
9. 動物介在活動（活動準備）
10. 動物介在活動（認知症）
11. 動物介在活動（レクリエーション）
12. 動物介在活動（アニマルセラピー）
13. 動物介在教育（活動準備）
14. 動物介在教育（幼稚園訪問）
15. 動物介在教育（活動計画）
16. 動物介在教育（アニマルセラピー）
17. 動物介在教療法
18. 動物介在介入（活動準備）
19. 動物介在介入（知的障害者での活動）
20. 動物介在介入（知的障害者の行動の問題「受動」）

21. 動物介在介入（知的障害者の行動の問題「粗暴」）
 22. 自分を知る心理テスト
 23. 芸術療法の理論と体験
 24. コラージュの体験と発表
 25. 子どものあそび（導入・仲間づくり・折り合う）
 26. 子どもと工作（満足できる工作）
 27. 動物園・水族館の歩き方（計画と準備）
 28. 動物園・水族館の歩き方（活動）
 29. 動物園・水族館の歩き方（振り返り）
 30. プレゼン発表、まとめと質疑
-

授業外学習

できるだけ多くの本や論文を読み、研究の理論的背景、研究法、今後の課題を理解する。

予習：指定された課題を読んでくる。

復習：講義内容や活動をまとめ、課題を提出する。

教科書

使用しない、講義の中で資料を配布する。

参考書

適宜案内する

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 妹尾護

授業の概要

水道水、河川水、地下水の水質について、その水質特性と水質汚染の評価に関する各分析項目を解説するとともに、水質汚染の現状や公害との関連性についても言及する。また、土壌汚染の現状を説明し、その中で特に有害重金属元素に焦点を当て、河川の底質、瀬戸内海の底質および道路脇粉塵の土壌調査に関する研究例を紹介する。

到達目標

- 1 水質汚染や土壌汚染の現状と汚染を引き起こす物質についての特性を理解する。
- 2 汚染防止や汚染対策に関する方法論を理解し、説明ができる。

評価方法

授業に取り組む態度・姿勢 2 0 %（到達目標 1 を評価）、発表点およびレポート 8 0 %（到達目標 1、2 を評価）により成績評価を行う。

注意事項

前・後期のレポート課題について、それぞれ発表会を行う。

授業計画

回数	内容
	前期オリエンテーション（授業内容、参考資料、授業外学習、評価方法、レポート等の説明）

第1回

第2回	水の性質
第3回	水質基準値
第4回	電気伝導度、pH
第5回	溶存酸素、酸化還元電位
第6回	COD（化学的酸素要求量）およびBOD（生物化学的酸素要求量）
第7回	pH4.8アルカリ度、溶存ケイ酸
第8回	水の硬度
第9回	水の硬度と私たちの生活
第10回	浄水方法
第11回	トリハロメタン、原虫対策

回数	内容
第12回	おいしい水、健康な水
第13回	これからの水処理方法
第14回	前期レポート課題について各自発表
第15回	前期レポートの作成、提出
第16回	後期オリエンテーション（授業内容、参考資料、授業外学習、評価方法、レポート等の説明）
第17回	水質汚染―水銀
第18回	水質汚染―カドミウム
第19回	水質汚染―ヒ素、鉛
第20回	水質汚染―マンガン、アルミニウム
第21回	水質汚染―硝酸態窒素および亜硝酸態窒素
第22回	水質汚染―フッ素
第23回	水質汚染―VOC
第24回	土壌汚染の現状
第25回	河川底質中の重金属元素
第26回	瀬戸内海の底質中の重金属元素
第27回	道路脇粉塵中の重金属元素－ 1
第28回	道路脇粉塵中の重金属元素－ 2
第29回	後期レポート課題について各自発表
第30回	後期レポートの作成、提出

授業外学習

学習時間の目安：合計 1 2 0 時間

前回の授業内容について復習するとともに、配布プリント等により、次回の授業内容を確認し、その範囲の専門用語の意味等を調べて理解しておくこと。

教科書

配布プリントを使用する。（教科書は使用しない）

参考書

授業中に適宜紹介する。

備考

環境リスク実験（HHM33）

通年

Experiment of Environmental Risk

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 妹尾護

授業の概要

水道水、河川水、地下水の水質調査、河川の底質、瀬戸内海の底質、道路脇粉塵等の土壌調査を通して、サンプリング方法や試料の機器分析方法を習得する。また、得られたデータについて、解析・考察・まとめを行い、レポートを作成する。

到達目標

- 1 水質汚染や土壌汚染に関する調査方法、また機器による分析方法を理解する
- 2 調査、分析によって得られたデータの解析・考察を行い、環境科学分野のレポートとしてまとめることができる。

評価方法

調査、実験等に取り組む態度・姿勢 3 0 %（到達目標 1 を評価）、レポート 7 0 %（到達目標 1、2 を評価）により成績評価を行う。

注意事項

レポートの進展に応じて、中間発表を行う。土曜日、日曜日に野外調査を行う場合がある。

授業計画

回数	内容
	前期の実験についてのオリエンテーション
第1回	
第2回	水質汚染に関する説明
第3回	水道水の水質測定についての説明
第4回	河川水の水質測定についての説明
第5回	地下水の水質測定についての説明
第6回	各分析項目の測定方法の説明
第7回	機器の使用方法的説明－ 1 （導電率計、pHメーター、吸光度分析計、溶存酸素測定器等）
第8回	機器の使用方法的説明－ 2 （イオンクロマトグラフ）
第9回	水道水の試料採取
第10回	河川水の試料採取
第11回	地下水の試料採取
第12回	水質測定－ 1 （導電率、pH、溶存ケイ酸、溶存酸素等）

回数	内容
第13回	水質測定－２（陽イオン、陰イオン）
第14回	分析結果のまとめ
第15回	前期レポートの作成
第16回	後期の実験についてのオリエンテーション
第17回	土壌汚染に関する説明
第18回	河川の底質の重金属分析についての説明
第19回	瀬戸内海の底質の重金属分析についての説明
第20回	道路脇粉塵の重金属分析についての説明
第21回	各分析項目の測定方法の説明
第22回	機器の使用方法の説明（蛍光X線分析線分析装置）
第23回	河川の底質の採取
第24回	瀬戸内海の底質の採取
第25回	道路脇粉塵の採取
第26回	試料の乾燥・粉碎等
第27回	重金属分析－１（蛍光X線分析）
第28回	重金属分析－２（蛍光X線分析）
第29回	分析結果のまとめ
第30回	後期レポートの作成

授業外学習

学習時間の目安：各回１時間、合計３０時間

前回の授業内容について復習するとともに、配布プリント等により、次回の授業内容を確認し、その範囲の専門用語の意味等を調べて理解しておくこと。

教科書

配布プリントを使用する。（教科書は使用しない）

参考書

授業中に適宜紹介する。

備考

年次	1 年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 武光浩史

授業の概要

生命活動の基本は遺伝子発現とタンパクへの翻訳で行われている。この講義では小動物の様々な疾病の診断と治療を分子生物学的なアプローチで解析、研究を行うのに必要な知識を習得する。

到達目標

- 分子生物学の基礎を理解し、研究計画を立案できるようになる

評価方法

講義時の討論・質疑応答及びプレゼンテーションにより評価する。評価はプレゼンテーション 8 0 %、質疑応答 2 0 %の重みで判定する。

注意事項

原則として課題提出の期限は厳守とする。

授業計画

【授業計画】

- 1週目：オリエンテーション
- 2週目：基礎遺伝学（1）：遺伝子の構成
- 3週目：基礎遺伝学（2）：セントラルドグマ
- 4週目：基礎遺伝学（3）：メンデル遺伝
- 5週目：基礎遺伝学（4）：遺伝子変異
- 6週目：遺伝子の実験（1）：PCR
- 7週目：遺伝子の実験（2）：リアルタイムPCR
- 8週目：遺伝子の実験（3）：リアルタイムPCRの応用
- 9週目：遺伝子の実験（4）：大腸菌を使った遺伝子の組み換え
- 10週目：遺伝子の実験（5）：ウイルスを使った遺伝子の組み換え
- 11週目：遺伝子の実験（6）：物理化学的な遺伝子の組み換え
- 12週目：遺伝子の実験（7）：DNAシーケンス
- 13週目：タンパク質の実験（1）：タンパク質の基礎知識
- 14 週目：タンパク質の実験（2）：ELISA
- 15週目：タンパク質の実験（3）ウエスタンブロット法
- 16週目：タンパク質の実験（4）その他の解析法
- 17週目：フローサイトメトリー（1）原理
- 18週目：フローサイトメトリー（2）細胞表面マーカーの評価
- 19週目：フローサイトメトリー（3）細胞内蛋白の評価
- 20週目：細胞培養（1）株化細胞
- 21週目：細胞培養（2）初代培養
- 22週目：細胞培養（3）培養条件
- 23週目：細胞培養（4）培養細胞の評価
- 24週目：まとめ
- 25週目：総合研究（1）
- 26週目：プレゼンテーション（1）
- 27週目：論文作成
- 28週目：プレゼンテーション（2）
- 29週目：論文作成

30週目：今後の展望

授業外学習

英語論文をまとめ、プレゼンテーションを定期的に行う。120時間を目安に学習を行う

教科書

原則としてプリントを配布する。必要に応じて授業内で指示する。

参考書

適宜、授業中に紹介する。

備考

比較心理学研究（HHM38）

通年

Research on Comparative Psychology

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 唐川千秋

授業の概要

現在われわれがもっているヒトの脳と“こころ”は進化の結果であり、他の種のそれと連続性をもつ。これについて、心理学、人類学等の幅広い視点から考え、どのような進化を遂げてきて、今があるのかを考える。

到達目標

- 進化のメカニズムについて理解する。
- ヒトの脳の構造および機能と、他の動物種との類似性と特異性を理解する。

評価方法

講義時の討論・質疑応答（到達目標1・2）及びレポート（到達目標1・2）により評価する。評価は、レポート80％、質疑応答20％の重みで判定する。総合計60点以上を合格とする。

注意事項

心理学、行動学に関する概論を予め理解しておくこと。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	淘汰（1）自然淘汰
第3回	淘汰（2）性淘汰
第4回	類人猿の進化と適応
第5回	環境コントロールのメカニズム
第6回	脳の進化と発達（1）進化と脳の構成
第7回	脳の進化と発達（2）進化とモジュール性
第8回	ヒトの心（1）機能的社会システム
第9回	ヒトの心（2）機能的生体システム
第10回	ヒトの心（3）発達とモジュール性
第11回	問題解決（1）限定合理性
第12回	問題解決（2）ヒューリスティクス
第13回	問題解決（3）問題解決
第14回	問題解決（4）推理
第15回	まとめと総括質疑&レポート提出
第16回	メンタルモデル（1）認知と脳のシステム
第17回	メンタルモデル（2）認知と脳のシステム
第18回	メンタルモデル（3）ヒトの脳の進化

回数	内容
第19回	メンタルモデル（4）社会的認知－自我・他者
第20回	メンタルモデル（5）社会的認知—theory of mind
第21回	メンタルモデル（6）社会的認知—theory of mind
第22回	一般知能の進化（1）心的能力の構成
第23回	一般知能の進化（2）ワーキングメモリー
第24回	一般知能の進化（3）遺伝的要因
第25回	一般知能の進化（4）環境的要因
第26回	現代社会における一般知能（1）進化と社会的競争
第27回	現代社会における一般知能（2）教育、仕事と知能
第28回	現代社会における一般知能（3）アカデミックな学習
第29回	今後の展望
第30回	まとめと総括質疑&レポート提出

授業外学習

予習：教科書の該当ページを読んで概略をつかむ。
復習：紹介する参考図書・文献にあたり、講義内容をまとめる。
各単元で課題レポートを作成する。

教科書

心の起源－脳・認知・一般知能の進化[ギアリー, D. C.（著） 小田亮（訳）|培風館|978-4-563-05714-5

参考書

藤田和生 2007 動物たちのゆたかな心 京都大学学術出版会、他、適宜紹介する。

備考

比較心理学演習（HHM39）

通年

Seminar in Comparative Psychology

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	2. 0 単位
担当教員	 唐川千秋

授業の概要

動物の認知過程に関する先行研究を通して、そこで用いられる実験計画の意味を考える。これにより、これまであまり研究対象とされてこなかったイヌ等の認知過程を検討するための知識と技法を修得する。

到達目標

- (1) 学習のメカニズムを理解する。
- (2) 研究法を理解する。
- (3) イヌ等を研究対象とした実験計画が立案できる。

評価方法

講義時の討論・質疑応答（到達目標1・2・3）及びレポート（到達目標1・2・3）により評価する。評価は、レポート80%、質疑応答20%の重みで判定する。総合計60点以上を合格とする。

注意事項

動物行動学の知識をもっていることを講義の前提とする。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	動物の認知（1）定義と歴史的背景
第3回	動物の認知（2）研究法
第4回	連合学習（1）条件づけの技法
第5回	連合学習（2）連合学習の本質
第6回	連合学習（3）表象
第7回	学習の条件（1）新奇性
第8回	学習の条件（2）注意
第9回	道具的条件づけ（1）道具的条件づけの本質
第10回	道具的条件づけ（2）パプロフ型条件づけと道具的条件づけ
第11回	道具的条件づけ（3）さまざまな種における道具的条件づけ
第12回	弁別学習（1）分類と理論
第13回	弁別学習（2）知識表象
第14回	まとめと総括質疑&レポート提出
第15回	記憶（1）長期保持
第16回	記憶（2）短期保持
第17回	表象：時間、数、系列位置

回数	内容
第18回	ナビゲーション（1）短距離
第19回	ナビゲーション（2）長距離
第20回	社会的学習（1）コミュニケーション
第21回	社会的学習（2）theory of mind
第22回	社会的学習（3）theory of mind
第23回	コミュニケーションとことば（1）動物のコミュニケーション
第24回	コミュニケーションとことば（2）言語訓練、言語学習の必要条件
第25回	イヌにおける比較心理学的アプローチ（1）イヌ科の進化
第26回	イヌにおける比較心理学的アプローチ（2）イヌにおける認知、問題解決
第27回	イヌにおける比較心理学的アプローチ（3）イヌにおける社会的認知
第28回	イヌにおける比較心理学的アプローチ（4）theory of mind
第29回	今後の展望
第30回	レポート提出及び総括質疑

授業外学習

予習：教科書の該当ページを読んで概略をつかむ。

復習：紹介する参考図書・文献にあたり、講義内容をまとめる。

課題レポートを作成する。

教科書

Animal learning and cognition (2nd ed.)|Pearce, J. M.|UK: Psychology Press|0-86377-434-2

参考書

Miklosi, A. 2007 Dog behavior, evolution, and cognition. Oxford University Press.他、適宜紹介する

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4． 0 単位
担当教員	 赤木恒雄

授業の概要

教育の分野の高度な専門知識・技能を修得する科目である。

生涯学習論研究では、まず1965年以降世界中で展開されている生涯学習の理論的系譜について考察する。さらに生涯学習における中心的学習者である成人に焦点を当て、成人の学習理論、すなわちアンドラゴジー理論について考察し、学習者支援のあり方を探求する。

到達目標

- 1．生涯学習理論を体系的により深く理解し、説明できる。
- 2．アンドラゴジー理論についてより深く理解し、説明できる。
- 3．成人学習者支援のあり方についてより深く理解し、説明できる。

評価方法

講義における発表や討議への参加状況 5 0 %（到達目標1, 2, 3を評価）、2 回のレポート（前期末、後期末） 5 0 %（到達目標1, 3を評価）により成績を評価し、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

- 1．レポートは作成上の基本的ルールを守り、特に引用した部分は明示しておくこと。
- 2．発表担当箇所については、責任を持ってレジュメを作成し、発表すること。
- 3．配付した資料を輪読形式で、学生に発表してもらい、それに基づき討議を行う。必要な資料等はその都度配布する。

授業計画

オリエンテーション

生涯学習の概念 P.ラングラン

生涯学習の理論(1) 学習社会論

生涯学習の理論(2) 「フォール報告書」

生涯学習の理論(3) UNESCOと国際成人教育会議

生涯学習の理論(4) OECDとリカレント教育

生涯学習の理論(5) E.ジェルビ、P.フレイレ

生涯学習の歴史的変遷(1) 古典的生涯学習論

生涯学習の歴史的変遷(2) 我が国への導入期(1970年代)

生涯学習の歴史的変遷(3) 中教審答申「生涯教育について」期(1980前半)

生涯学習の歴史的変遷(4) 臨時教育審議会答申期(1985年以降)

生涯学習の歴史的変遷(5) 生涯学習振興法以降(1990年～)

生涯学習の歴史的変遷(6) 生涯学習政策における課題

前期の総まとめ レポートIの提出

ペダゴジー理論(1) 子どもについて

ペダゴジー理論(2) 子どもの学習

アンドラゴジー理論(1) 成人学習者

アンドラゴジー理論(2) 成人学習者の発達特性1

アンドラゴジー理論(3) 成人学習者の発達特性2

アンドラゴジー理論(4) 成人学習の方法原理・形態

アンドラゴジー理論(5) 学習の外的阻害要因

アンドラゴジー理論(6) 学習の内的阻害要因

アンドラゴジー理論(7) 自己主導的学習

アンドラゴジー理論(8) 成人の学習プロセス1

アンドラゴジー理論(9) 成人の学習プロセス2

アンドラゴジー理論とペダゴジー理論の比較

自己主導的学習能力の育成に向けて

成人学習者の支援のあり方(1)

成人学習者の支援のあり方(2)

後期の総まとめ レポートIIの提出

授業外学習

学習時間の目安は合計120時間である。

1. 最初の講義で提示する基礎文献を事前に必ず読み込んでおくこと。
 2. 配付資料を授業前までに精読し、講義終了後には必ず復習すうこと。
-

教科書

講義時に資料を配付する。

参考書

1. 渡邊洋子『生涯学習時代の成人教育』明石書店 ,2002. ISBN 4-7503-1618-0
 2. 『成人期の学習—理論と実践—』鳳書房 ,2005. ISBN 4-900304-98-0
 3. マルカム・ノールズ著『成人教育の現代的課題』鳳書房,2002. ISBN 4-900304-83-2
 4. 市川昭午『生涯教育の理論と構造』教育開発研究社,1981. ISBN 978-4-87380-010-3
-

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 小山悦司

授業の概要

社会の発展に果たす教育及び教師の役割について考察すると共に、教育人材開発のための理論と方法を探求することを目的としている。具体的には、まず教師や教育指導者に求められる力量の内実を、技術的側面と人格的側面から明らかにする。そして力量形成の方法や、次代の国際社会を担う人材開発（staff development)のあり方について、専門職的発達論（professional development)、成人学習理論、キャリア開発プログラム、養成・研修カリキュラムの視点から、理論面にウエイトを置いて研究する。

到達目標

- ・教職生涯にわたる力量形成のあり方について理解し説明できる。
- ・専門職的発達のプロセスを職能成長論に立脚して理解し説明できる。

評価方法

研究レポートの論点が題意に沿っているかどうかなどの観点から総合的に評価する。評価の比率は、レポート（70％）、口頭試問（30％）を基準とする。

注意事項

研究レポート作成上の基本的なルールを守り、特に引用した部分は明示しておくこと。

授業計画

オリエンテーション

教育人材開発の基礎理念（1）

教育人材開発の基礎理念（2）

教育人材開発の基礎理念（3）

教育人材開発論の理論的系譜（1）

教育人材開発論の理論的系譜（2）

教育人材開発論の理論的系譜（3）

力量の技能的側面（1）テクニカルスキル

力量の技能的側面（2）コンセプチュアルスキル

力量の人格的側面（1）パーソナリティ（狭義）

力量の人格的側面（2）モチベーション

教職生涯にわたる力量形成のあり方（1）

教職生涯にわたる力量形成のあり方（2）

教職生涯にわたる力量形成のあり方（3）

中間レポート作成・提出

オリエンテーション — 中間レポート講評 —

養成段階における力量形成（1）

養成段階における力量形成（2）

養成段階における力量形成（3）

採用段階における力量形成（1）

採用段階における力量形成（2）

現職段階における力量形成（1）

現職段階における力量形成（2）

現職段階における力量形成（3）

専門職的発達のプロセス－職能成長論－（1）

専門職的発達のプロセス－職能成長論－（2）

専門職的発達のプロセス－研修の体系化－
専門職的発達のプロセス－成人学習論－
教師教育のあるべき姿を求めて－まとめ
レポート作成・提出

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間

授業中に指示する参考文献や資料に基づいて、研究レポートの提出を求める。また、各授業の最初に前回の復習を兼ねた口頭試問を行うので、よく復習しておくこと。

教科書

使用しない。適宜資料を配布する。

参考書

適宜指示する。

備考

特別研究（HHM52）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 河野正英

授業の概要

資本主義や市場経済の特徴を理解し、現代社会に対する将来展望を持てるようにしたい。

到達目標

- 1）世界経済の現状、日本経済の現状について知る。
- 2）時事問題に対して知識を持ち、自分の言葉で説明出来る。
- 3）各自設定したテーマに基づき修士論文を完成させる。

評価方法

資料検索の範囲（20％）＋資料分析の深度（30％）＋全体的な論文の仕上がり（50％）により評価する。（到達目標 1)~3) を確認）

注意事項

特になし。

授業計画

- 第1回~第3回：論文作成の基礎知識
第4回~第10回：資料検索の方法
第11回~第15回：資料分析の方法
第16回~第25回：文章作成と論旨の徹底化
第26回~第29回：論文としての完成度を高める方法
第30回：修士論文の完成と発表

授業外学習

- 受講者が決まればその都度指導する。
読むべき資料は授業内で指示する。
予習と復習が必要。
普段から時事的なニュースを注意して見ておくこと。

教科書

適宜指示する。

参考書

適宜指示する。

備考

特別研究（HHM53）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 大川元久

授業の概要

本講座は医学教育や研究に携わる者としての基本的な考え方や方法論をもとに研究を実践されるものである。その特徴は救急・災害医療を病院前救急医療分野という立場でその医学的教育や救急・災害医療体制を医療危機管理学的視点で科学的根拠に基づいて実践していくための研究をテーマとして教育・指導していくものである。対象は医師、看護師、救急救命士等の救急医療に携わる者とする。個別指導研究において研究を含む『教える技術』について理解と実践にその習得に重きを置く。すなわち『教えることを学ぶ』ことである。ついで、医療教育システムのインストラクショナルデザインについて学び応用出来るようにする。講義はeラーニングなどを活用し、各個人が持つ能力を最大限に引き出し社会に貢献できる人材を養成する。講義の前提は多くの人の尊い命のことを考えた生命倫理に基づくことであることをしっかり認識しておいて下さい。

到達目標

救急・災害医学をチーム医療を行うスタッフの一員として研究活動を行い、学術的プレゼンテーションができる。

評価方法

研究発表成果もしくは論文(60%)、レポート(20%)、口頭試問(20%)

注意事項

研究発表は当該学会発表もしくは論文完成に重きをおいて評価する。

授業計画

救急・災害医療を教育学に共通する要素を研究対象とする医療教育学の視点から、救急・災害医療について研究する。配布資料は各回に送付する。

4月のオリエンテーションを行ったのちに教科書：上手な教え方の教科書～入門インストラクショナルデザインからアウトラインとして学習項目をレポート課題として提出する（Google driveの使用法など詳細は随時説明する）。特に、その研究テーマを選定した動機・研究対象の背景・現在の課題を明確にする。この段階が総論的な学習で7回目の講義までの計画となる。続いて学習者の到達目標と現状とのギャップを埋めるために必要な項目・技術について学習を実施していく。特に8回目以降は各論的に自らのプレゼンテーションを活用して学んでいく。これらの後に科目修了試験（関連学会等での発表に代用可）をもって単位認定する。

授業外学習

救急医療系の標準教育プログラムであるBLS、ACLS(ICLS)、PSLS/ISLS、JPTEC/JNTEC/JATEC等に積極的に参加する。また、各種災害訓練やメディカル・ラリーに参加する。

全国レベルの学会・研究会に積極的に参加してもらう（参加費自己負担）。

教科書

上手な教え方の教科書～入門インストラクショナルデザイン 向後千春 技術評論社 ISBN: 978-4774174617

参考書

インストラクショナルデザインとテクノロジー：教える技術の動向と課題・鈴木克明 監修翻訳・北大路書房・978-4-7628-2818-8

インストラクショナルデザイン―教師のためのルールブック 島宗 理 著/米田出版 (2004/11)

その他を授業中に紹介する。

備考

特別研究（HHM55）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 唐川千秋

授業の概要

各自の研究テーマに従い、修士論文に向けた実験・調査を行う。

到達目標

- 1．研究課題を自分で見つけ出し、それに科学的にアプローチできる能力を身につける。
- 2．専門性の高い研究成果を、適切な用語で、かつ分かりやすく論旨展開して公表できる。

評価方法

修士論文発表会での口頭試問（到達目標2）及び修士論文（到達目標1）により評価する。評価は、論文（80％）、口頭試問（20％）の重みで判定する。

注意事項

9月下旬に中間発表を行う。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	先行研究の精読
第3回	先行研究の精読
第4回	先行研究の精読
第5回	先行研究の精読
第6回	構想発表
第7回	実験・調査計画Iの立案
第8回	実験・調査計画Iの立案
第9回	実験・調査計画Iの実施
第10回	実験・調査計画Iの実施
第11回	実験・調査計画Iの実施
第12回	実験等の結果分析及び考察
第13回	実験等の結果分析及び考察
第14回	実験・調査計画IIの立案
第15回	実験・調査計画IIの立案
第16回	実験・調査計画IIの立案
第17回	実験・調査計画IIの実施
第18回	実験・調査計画IIの実施

回数	内容
第19回	実験・調査計画IIの実施
第20回	実験・調査計画IIの実施
第21回	実験等の結果分析及び考察
第22回	実験等の結果分析及び考察
第23回	実験等の結果分析及び考察
第24回	論文・要旨作成（初稿）
第25回	論文・要旨作成（二校）
第26回	論文・要旨作成（三校）
第27回	修士論文発表会の準備
第28回	修士論文発表会
第29回	論文加筆修正
第30回	論文提出

授業外学習

- ・既読の文献の内容を整理する。
- ・実験・調査を行い、それらを適切なかたちでまとめる。

教科書

使用しない。

参考書

適宜案内する。

備考

特別研究（HHM56）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	👤 猪木原孝二

授業の概要

研究のテーマは、運動刺激の強弱及び運動種目の違いが生体にどのような変化を与えているのかを究明し、各自が考えている生体に対する運動刺激について考察させ、健康体と運動の関係、生体反応の変化等を実験および調査によって究明していく。

到達目標

運動刺激の強弱が身体にどのような影響を与えたか、さらにその強度・頻度・時間の配分等を算出する。

評価方法

特別研究に取り組む態度・姿勢(30%)、中間発表および提出論文(70%)により総合的に評価する。

注意事項

特になし

授業計画

4 月

オリエンテーション

4 月～7 月

測定器の説明

筋力測定（大腿四頭筋及びその周りの筋力測定・エクセントリック・コンセントリックなどの測定）（キンコム）

骨密度測定（頭骨と尺骨の間の骨塩量の測定）

データの収集・分析・調査を行う。

8 月

中間のまとめ

9 月～1 1 月

文献の収集・整理

1 1 月～1 月

論文作成

論文提出

授業外学習

各自研究テーマに沿って論文を完成させるのに必要なデータの収集を行わせる。

教科書

使用しない。

参考書

使用しない。

備考

特別研究（HHM57）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 内藤 整

授業の概要

豊かな人間生活のために必要な食料や生活資材となる作物の安定した生産を可能にするための研究を行う。植物の生理・生態やそれに関連する形態的特徴の解明、栽培法の構築を目的として各自が取り上げたテーマについて研究を行う。

到達目標

- 1.自ら設定した課題に答えを出し、新たな知を創出できる。
- 2.研究成果を分かりやすく伝えることができる。

評価方法

研究論文の内容70%（到達目標1を評価）、研究態度10%（到達目標1を評価）、プレゼンテーションの内容20%（到達目標2を評価）によって評価する。

注意事項

- ・研究に使用する器具・薬品には危険なものもある。真剣な態度で取り組むこと。
- ・実験には生物（植物）を用いるので、日々の管理が必要である。

授業計画

作物の物質生産にかかわる形態生理に関する研究や栽培学的研究を行う。

1. 植物の物質生産機能（光合成、呼吸、蒸散）に関する研究
2. 環境ストレス条件下での植物の生理機能の解析
3. ストレス耐性に関わる形態的特徴の解明
4. 生産性を高める栽培法の確立
5. その他、植物の利用に関する研究。

以上のような研究分野から各自が取り組む研究内容を決め、研究に取り組む。現状を認識し、問題点を整理するための文献調査－仮説の設定と研究計画の立案－実験の遂行－結果の取りまとめと考察－問題点の再整理－更なる研究計画の立案とその遂行というような一連の研究活動（真理の探究）を行い、一年間の研究結果を論文としてまとめ、発表する。

授業外学習

文献の調査、実験植物の栽培管理、分かりやすい発表のための練習など。

教科書

使用しない。プリントを配布する。

参考書

日本作物学会紀事、Plant Production Science、Tropical Agriculture and Development、SAGO PALM 他適宜案内する。

備考

特別研究（HHM58）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 枝松千尋

授業の概要

バイオメカニクスに関する研究を行い修士論文としてまとめる。

到達目標

- 1 「研究課題に対して科学的にアプローチする力を身につける」
- 2 「学会発表・論文投稿ができる力を身につける」

評価方法

特別研究に取り組む態度・姿勢(30%)、修士論文発表会および修士論文(70%)により総合的に評価する。

上記の評価方法により、到達目標の達成度を総合的に評価し、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

実験に関する諸手続き、発表や審査、論文提出などの日程を十分に把握しておくこと。

授業計画

- 1週目：オリエンテーション
- 2週目～8週目：先行研究の調査とテーマの設定
- 9週目～10週目：研究の実施に関わる諸手続き
- 11週目～20週目：実験の実施および解析
- 21週目～25週目：論文作成
- 26週目：発表準備
- 27週目：修士論文発表
- 28週目～29週目：論文の加筆・修正
- 30週目：論文提出

授業外学習

文献収集を徹底して行う。

実験を計画的に行うとともに、データ解析を営々と取り組む。

教科書

使用しない。

参考書

適宜紹介する。

備考

特別研究（HHM59）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 吉田悦男

授業の概要

生活習慣病と高齢者疾患をキーワードとした研究を行い修士論文としてまとめる。

到達目標

科学的論理的思考法を覚え、科学論文として専門ジャーナルに投稿できる能力を身につける。

評価方法

研究過程における毎月の進捗状況報告レポート（５０％）および最終修士論文の発表内容（５０％）により評価する。

注意事項

自ら資料を探し出す能力も高めてもらいたい。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	先行類似研究分析
第3回	先行研究分析：関連分野
第4回	先行研究分析：論点の明確化
第5回	テーマの設定検討
第6回	研究テーマの決定
第7回	研究方法・手順の検討
第8回	研究方法・設備の検討
第9回	テーマと研究方法の再検討
第10回	研究計画決定
第11回	実験研究開始
第12回	実験研究 1
第13回	実験研究 2
第14回	実験研究 3
第15回	実験研究 4
第16回	実験研究終了
第17回	研究結果分析考察
第18回	中間報告会
第19回	研究結果分析考察訂正
第20回	論文作成開始

回数	内容
第21回	論文作成 序論 方法
第22回	論文作成 結果
第23回	論文作成 考察
第24回	論文仮提出
第25回	論文修正 サマリー
第26回	論文修正
第27回	最終論文提出 抄録作成
第28回	研究発表準備 発表原稿
第29回	研究発表準備 スライド
第30回	研究発表

授業外学習

授業以外に文献検索などの自己学習を積極的にすすめること。

教科書

教科書は使用しない。

参考書

参考文献は、適宜案内する。

備考

特別研究（HHM60）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 矢田貝智恵子

授業の概要

これまで修得してきた食や健康に関する知識やスキルを踏まえ、さらに健康分野の高度な専門知識・技能を身につけ、その成果を修士論文にまとめ、発表することを目的としている。具体的には、修得した分析能力・問題解決能力・研究能力をさらに高度化し、設定したテーマについて、調査・研究を進め、関連する文献を収集・講読し、新たな知見を得、それら研究成果を修士論文としてまとめて発表を行う。

到達目標

- 1 分析能力・問題解決能力・研究能力をさらに高度化し、研究活動を行なうことができる。
- 2 研究成果を修士論文としてまとめ、提出する。
- 3 食と健康について理解を深め、研究発表能力を身につける。

評価方法

研究活動60％（到達目標1）、修士論文発表会および提出論文の評価40％（到達目標2、3）により評価する。

注意事項

- ・定期的に進捗状況を報告すること。
- ・研究テーマによっては、「人を対象とする研究倫理」等についての研修会を受講すること。

授業計画

前期

- ・オリエンテーション・研究計画の確認
- ・研究（調査・実験）の実施、文献収集・講読
- ・研究計画書作成
- ・研究（調査・実験）の実施
- ・中間報告会（9月下旬）

後期

- ・研究（調査・実験）の実施
- ・中間報告会（12月下旬）
- ・査読用修士論文提出準備
- ・修士論文要旨・査読用論文提出（1月末の平日〆切）
- ・修士発表会準備
- ・修士論文発表会口頭試問（2月中旬）
- ・修士論文作成（最終）
- ・修士論文提出（2月第4水曜日〆切）

授業外学習

関連する情報を得るため、学内外の図書館などを利用し、文献収集を行うなど、修士論文作成に取り組む。

教科書

なし

参考書

適宜紹介する。

備考

特別研究（HHM61）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 川添敏弘

授業の概要

人間動物関係学および動物に関連するテーマに深く取り組んでいくことを目標とする。

人間動物関係学は分野をまたがり、融合し、新たな分野がつくられてきた。本授業でも、医学、心理学、福祉学、動物行動学、社会福祉学、地域コミュニティ学、実験動物学などについて実践的に学んでいく。

振り返りの中で多様な各学術分野の重要性を理解し専門領域を深めたり、他者を支援することや地域連携を行う力を身に付けたりしていく

到達目標

1. 研究課題を決定し、それに科学的アプローチできる力を身に付ける。
2. 専門性の高い研究成果を、科学的、論理的に展開し公表できる。
3. 専門性の高い技術を身に付ける。

評価方法

修士論文発表会での質疑応答および修士論文により評価する。

評価は、論文（70%）、プレゼンおよび質疑応答（30%）の重みで判定する（到達目標1～3を評価）。

以上により成績を評価し、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

9月に中間発表を行う。

授業計画

1. オリエンテーション
2. ディスカッション
3. テーマを探す
4. 先行研究の紹介
5. 構想発表1
6. 研究計画の立案1
7. 先行研究の精読1
8. 統計の基礎
9. SPSSを用いた分析（X2検定、t検定、他）
10. SPSSを用いた分析（因子分析、分散分析）
11. Excel統計を用いたノンパラ検定
12. アンケートの作り方
13. 質的研究法（面接法、フィールドワーク）
14. 構想発表2
15. 中間発表
16. 研究計画の立案2
17. 研究計画の立案3
18. 研究調査1 報告
19. 研究調査2 修正
20. 研究調査3 報告
21. 研究調査4 修正
22. 研究調査結果の分析と考察1
23. 研究調査結果の分析と考察2
24. 研究調査結果の分析と考察3

25. 論文作成1 報告	
26. 論文作成2 修正	
27. 論文作成3 報告	
28. 論文作成4 修正	
29. 論文加筆修正	
30. 論文提出、発表	

授業外学習

1. 文献を読み、整理する。	
2. 実施した調査研究を適切にまとめる。	
3. 講義の内容を整理し、応用できるようにする。	
4. 指導を受けながら論文としてまとめていく。	

教科書

使用しない	
-------	--

参考書

適宜案内する	
--------	--

備考

年次	2 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 荒木直彦

授業の概要

社会生活を充実するためのスポーツ、健康運動の役割を研究する。運動時における生体反応や事例調査により、健康の保持・増進を促す量的、質的な運動の特徴を解明、運動方法の構築を目指して自らが取り上げた課題について研究を行う。

到達目標

各自が設定した課題に答えを出し、新たな知識を創出する。

評価方法

研究論文の内容（80％）、研究態度（10％）、プレゼンテーション内容（10％）によって評価する。

注意事項

各調査や運動科学実験では負荷をかける特性上危険を伴う。また、多種の個人情報を取り扱うため、研究テーマにかかわらず、研究の事前事後も含め細心の注意をはらうこと。

授業計画

スポーツの技術、戦術、そして戦略にかかわる運動負荷試験を伴う研究や、健康運動の生理学的研究を行う。

- 1．運動負荷によるストレス条件下での生体反応の解析
- 2．運動負荷による耐性（適応・馴化）と向上の条件設定
- 3．効果的な運動方法の提案、確立
- 4．スポーツと健康運動の共通形態の解明
- 5．その他、スポーツ行政や保健体育答申、健康政策の関連した研究

以上のような分野から各自が取り組む研究内容を決定し、研究に取り組む。運動生理学的な事象のみならず、研究を取り巻く社会環境の現状を認識し、問題点整理のための文献調査－仮説の設定と研究計画の立案－実験、事例調査の実施－データの取りまとめと分析、考察－問題点の再整理－研究計画の改善、再立案と実施といった研究活動から 1 年間の研究結果を論文としてまとめ、発表する。

授業外学習

（文献調査、事例調査、運動負荷予備実験等、そしてプレゼンテーションの練習をすること）

教科書

使用しない。資料を配布。

参考書

運動生理学分野テキストや体力医学会記事、運動生理学会記事、体育学会記事などを適宜案内する。

備考

特別研究（HHM63）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 武光浩史

授業の概要

小動物臨床においてこれまで治療法の確立していない、あるいは検査法の確立していない分野に対して分子生物的手法を用いて新たな知見を得るために、各自が実験計画の立案、参考文献検索、データ解析を行い、論文を作成する。

到達目標

各自の研究課題の内容で修士論文の作成を行う

評価方法

論文提出（60％）とプレゼンテーション（40％）

注意事項

論文作成に必要な英語力も並行して身につけること

授業計画

<前期>

研究テーマの決定と研究プロトコル作成。必要な検体の収集などを行い、7月頃から実験を開始する。並行して論文を作成。

- ・ 研究（調査・実験）の実施
- ・ 中間報告

<後期>

11月までに実験終了。12月までに結果と考察を論文に加えて論文を完成させる。研究科の研究報告会、学会での発表、論文の投稿を年度末までに行う。

- ・ 研究（調査・実験）の実施
- ・ 中間報告
- ・ 査読用修士論文提出準備
- ・ 修士論文要旨・査読用論文提出
- ・ 修士発表会準備
- ・ 修士論文発表会口頭試問（2月）
- ・ 修士論文作成（最終）
- ・ 修士論文提出

授業外学習

テーマにおける最新の知見を常にアップデートしておくこと

教科書

使用しない

参考書

適宜紹介する

特別研究（HHM83）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 湯川尚一郎

授業の概要

各自の研究テーマに従い、修士論文に向けた実験・調査を行い論文を完成させる。

到達目標

1. 研究課題を自分で見つけ出し、それに科学的にアプローチできる能力を身につける。
2. 専門性の高い研究成果を、適切な用語で、かつ分かりやすく論旨展開して公表できる。

評価方法

修士論文発表会での口頭試問（到達目標1, 2）及び修士論文（到達目標1, 2）により評価する。評価は、論文（80％）、口頭試問（20％）の重みで判定する。

注意事項

9月下旬に中間発表を行う。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	先行研究の精読(1)国内文献
第3回	先行研究の精読(2)海外文献
第4回	先行研究の精読(3)国内文献の比較
第5回	先行研究の精読(4)海外文献の比較
第6回	構想発表
第7回	実験・調査計画Ⅰの立案(1)過去の文献から
第8回	実験・調査計画Ⅰの立案(2)本学の機材から
第9回	実験・調査計画Ⅰの実施(1)選択培養
第10回	実験・調査計画Ⅰの実施(2)分離培養
第11回	実験・調査計画Ⅰの実施(3)菌種同定
第12回	実験等の結果分析及び考察(1)調査検体について
第13回	実験等の結果分析及び考察(2)菌種について
第14回	実験・調査計画Ⅱの立案(1)過去の文献から
第15回	実験・調査計画Ⅱの立案(2)本学の機材から
第16回	実験・調査計画Ⅱの立案(3)具体的な方法の提案
第17回	実験・調査計画Ⅱの実施(1)選択培養
第18回	実験・調査計画Ⅱの実施(2)分離培養

回数	内容
第19回	実験・調査計画Ⅱの実施(3)菌種同定
第20回	実験・調査計画Ⅱの実施(4)遺伝子検査
第21回	実験等の結果分析及び考察(1)調査検体について
第22回	実験等の結果分析及び考察(2)菌種について
第23回	実験等の結果分析及び考察(3)遺伝子検査結果について
第24回	論文・要旨作成（初稿）
第25回	論文・要旨作成（二校）
第26回	論文・要旨作成（三校）
第27回	修士論文発表会の準備
第28回	修士論文発表会
第29回	論文加筆修正
第30回	論文提出

授業外学習

- ・既読の文献の内容を整理する。
- ・実験・調査を行い、それらを適切なかたちでまとめる。

教科書

Infectious Diseases of the Dog and Cat: A Color Handbook | J Scott Weese, Michelle Evason : CRC Press | 978-1498775519
大学生 学びのハンドブック[4訂版] | 世界思想社 編集部 | 世界思想社 | 978-4790717072

参考書

適宜案内する。

備考

特別研究（HHM84）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 村山公保

授業の概要

持続可能な社会の構築のために、IoTなどの情報技術を活用する研究を行う。各自が研究テーマを設定し、文献調査、システムの設計や構築、運用テスト等を行う。得られた結果を分析・解析し、考察を加えて最終的に論文としてまとめる。

到達目標

1. 情報技術を使って社会で役だつものを提案や構築することができる。
2. 文献等を読み、自力で自分の技術力を向上させ、それ以前に、できなかったことができるようになる。
3. 最終的に論文を作成し、内容をプレゼンテーションすることが出来る。

評価方法

・特別研究に取り組む態度・意欲40%(到達目標1、2を評価)、論文内容・プレゼンテーション60%(到達目標3を評価)の重みで判定する。

注意事項

・仮想環境(VirtualBox等)が動作するノートパソコンを持参すること。

授業計画

（テーマ指導と助言）

研究テーマを定め、それを実現するために必要な技能の習得や研究の進め方について指導・助言をする。

（研究形態）

原則として毎週研究の進行状況を聞き、取り組みを前進させるべく指導・助言を行う。また、毎月「研究報告書」の提出を求める。

（前期スケジュール）

前期中に研究目的、研究計画および研究方法を明確にするため、研究計画書を作成する。

（後期スケジュール）

受講者は夏季休暇を利用してシステムの設計や構築、運用を行い、11月ごろまでに論文素案を作成し、指導・助言、再検討へと進んで成果を深めながら、1月上旬までにまとめる。

（研究報告会と総合評価）

人間文化研究科のスケジュールに合わせ、研究報告会で研究成果を発表し、質疑応答を行う。

授業外学習

常に研究の進行状況の報告を求めるので、いつでも発表できるように準備しておくこと。

教科書

井上直也、村山公保、竹下隆史、荒井透、荻田幸雄、「マスタリングTCP/IP入門編 第6版」、オーム社、2019、978-4-274-22447-8

参考書

必要に応じて、適宜紹介する

備考

特別研究（HBM85）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 徳田美智

授業の概要

企業や非営利団体、公共団体など様々な組織は、絶えず変化する環境の中で経営活動を行っている。さらに、グローバル化やICTなど技術の発展に伴い、企業が行う意思決定は、より高度化・複雑化している。現在社会において組織が抱える課題や業界の動向、リスク対策など、経営学から捉えた研究テーマを設定し、文献調査、アンケート調査等を行う。得られた資料を分析・解析し、考察を加えて最終的に論文としてまとめる。

到達目標

- 1．企業活動に対する関心を高め、様々な文献にあたり、自身のテーマを決定することができる。
- 2．文献使用やアンケート結果の分析・解析を行うことができる。
- 3．論文作成上必要な論理的思考とその展開方法を身につける。
- 4．最終的に論文を作成し、内容をプレゼンテーションすることが出来る

評価方法

特別研究へ取り組む態度・意欲：10%（到達目標 1 を評価）、資料検索の範囲：20%（到達目標 2 を評価）、資料分析：20%（到達目標 2 を評価）、中間発表：10%（到達目標3を評価）、全体的な論文の仕上がり：40%（到達目標3、4を評価）により評価する。

注意事項

- ・指導事項をよく聞いて理解すること。
- ・論文執筆に必要な研究手法について、基本的なことをしっかりと理解しておくこと。

授業計画

【テーマ指導と決定】

経営リスク研究で提示した課題や問題点から更に発展させるにふさわしいテーマを 1 つ選ぶか、または、経営学に関連した研究テーマを定め、発展させる研究の方向と研究方法について指導・助言をする。

【研究形態】

原則として毎週研究テーマを絞り込むための討論と並行して、文献調査と研究の進行状況を聞き、常に最新の段階へと取り組みを前進させるべく指導・助言を継続する。また、毎月「研究報告書」の提出を求める。

【前期スケジュール】

前期中に研究目的、研究計画および研究方法を確認するため研究報告書を点検する。前期中の最終週に、中間報告書として報告を求める。

【後期スケジュール】

受講者は夏季休暇を利用して論文素案を書き上げ、これを点検あるいは書き直し、11月から閲覧、指導・助言、再検討へと進んで成果を深めながら、1月上旬までにまとめる。

【研究報告会と総合評価】

人間文化研究科のスケジュールに合わせ、研究報告会で研究成果を発表し、質疑応答を行う。

授業外学習

学習時間の目安：240時間

- ・各自のテーマにあわせて、関連する先行研究となる文献や書籍に多くあたること。
- ・研究の進捗について、発表できるように準備しておくこと。

教科書

それぞれ関心のある分野に応じて、相談の上、適宜紹介する。

参考書

それぞれ関心のある分野に応じて、相談の上、適宜紹介する。

備考

健康運動科学の研究（HHM15）

通年

Research on the health and exercise physiology

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 荒木直彦  枝松千尋

授業の概要

「健康体」あるいは「健康生活」を維持することは、人間にとって社会生活の基盤となる非常に重要なことである。本講義は、「健康生活」を送るうえの条件である「運動」を生理学的な観点から捉え、「健康運動」を科学的に学習する。

到達目標

1 健康運動(Aerobics Exercise &Anerobics Exercise)について科学的に検証していく能力を身につける。

評価方法

評価は、課題レポート（50％）、調査発表（30％）、創造性と構成力（20％）によって総合的に判定する。

上記の評価方法により、到達目標の達成度を総合的に評価し、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

レポートは、個々に課題レポートを提示する。

調査発表は、課題レポート作成に関する内容で定期的に口頭発表を行う。

授業計画

1週目：オリエンテーション（講義概要、授業計画及び方法他）（荒木 枝松）

2週目：健康とは（枝松）

3週目：健康生活の条件（枝松）

4週目：人体の構造（I）（枝松）

5週目：人体の構造（II）（枝松）

6週目：呼吸循環器の構造と機能（枝松）

7週目：酸素の役割（枝松）

8週目：血液の役割（荒木）

9週目：運動と呼吸循環機能（課題レポートI提示）（荒木）

10週目：神経系の構造と機能（荒木）

11週目：中枢神経と末梢神経の役割（荒木）

12週目：体性神経と自律神経（荒木）

13週目：運動と神経系機能（課題レポートII提示）（荒木）

14週目：口頭発表会（荒木 枝松）

15週目：まとめ（荒木 枝松）

16週目：内分泌系の構造と機能（枝松）

17週目：ホルモンの役割（枝松）

18週目：運動とホルモンの関係（枝松）

19週目：運動発現の仕組み（枝松）

20週目：運動と生体反応（枝松）

21週目：健康と運動の関係（課題レポートIII提示）（枝松）

22週目：体力の構成（荒木）

23週目：運動と体力（荒木）

24週目：運動と適応及び免疫力（課題レポートIV提示）（荒木）

25週目：口頭発表会（荒木 枝松）

26週目：健康運動の適正範囲と科学的根拠（荒木）

27週目：健康運動の方法と科学的根拠（荒木）

28週目：健康運動のプログラミング（課題レポートV提示）（荒木）

29週目：口頭発表会（荒木 枝松）

30週目：まとめ（後期及び総合的）（荒木 枝松）

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間（予習、復習及び文献検索、レポート作成、測定実験）

本講義は、人体の仕組みと機能、また運動に対する生体反応について解説するため、生理学的な文献検索と理解、さらには講義時間外の測定実験により専門的な知識の向上に努める。また課題レポートは、單元ごとに文献調査により作成する。年間、6テーマ出題する。

教科書

使用しない。

参考書

オストランド「運動生理学」（大修館書店）

備考

健康運動科学実験（HHM16）

前期

Experiment of the health and exercise physiology

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 荒木直彦  枝松千尋

授業の概要

本演習は、身体運動機能の測定を行う。基本的には、運動生理学・バイオメカニクスに関する実験機器の操作と分析資料の解読及び判定方法を実験を通して学習する。

到達目標

身体運動のメカニズムを理解し、健康運動を科学的に分析する能力を身につける。

評価方法

評価は、機器操作（30％）、分析資料の解読及び判定（30％）、レポート（40％）などにより総合的に評価する。
上記の評価方法により、到達目標の達成度を総合的に評価し、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

運動科学実験を行うために次のものを準備すること。
・ジャージ及びシューズ

授業計画

- 1週目：オリエンテーション（講義概要、講義方法及びスケジュールなど）（荒木・枝松）
- 2週目：体組成分析機器（InBody）の説明及び機器操作（荒木）
- 3週目：体組成分析実験（荒木）
- 4週目：体組成分析資料の見方及び判定評価（荒木）
- 5週目：ディスカッション（課題レポート1）（荒木）
- 6週目：筋電図装置の説明及び機器操作（枝松）
- 7週目：筋電図実験1（枝松）
- 8週目：筋電図実験2（枝松）
- 9週目：筋電図分析資料の見方及び判定評価（枝松）
- 10週目：ディスカッション（課題レポート2）（枝松）
- 11週目：筋電図・筋音図装置の説明及び機器操作（枝松）
- 12週目：筋電図・筋音図実験1（枝松）
- 13週目：筋電図・筋音図実験2（枝松）
- 14週目：筋電図・筋音図分析資料の見方及び判定評価（枝松）
- 15週目：ディスカッション（課題レポート3）（枝松）
- 16週目：等速性筋力測定装置の説明及び機器操作（荒木）
- 17週目：等速性筋力測定実験1（荒木）
- 18週目：等速性筋力測定実験2（荒木）
- 19週目：等速性筋力測定資料の見方及び判定評価（荒木）
- 20週目：ディスカッション（課題レポート4）（荒木）
- 21週目：床反力測定装置の説明及び機器操作（枝松）
- 22週目：床反力測定実験1（枝松）
- 23週目：床反力測定実験2（枝松）
- 24週目：床反力分析資料の見方及び判定評価（枝松）
- 25週目：ディスカッション（課題レポート5）（枝松）
- 26週目：動作解析装置の説明及び機器操作（枝松）
- 27週目：動作解析実験1（枝松）
- 28週目：動作解析実験2（枝松）

29週目：動作解析分析資料の見方及び判定評価（枝松）

30週目：ディスカッション（課題レポート6）（枝松）

授業外学習

学習時間の目安：合計30時間（予習、復習及び文献検索、レポート作成、測定実験）

身体運動に関する実験を行うため生理学的な人体の機能、安全性に関する対応について事前に理解しておくこと。

運動生理学的・バイオメカニクスの文献検索と理解、さらには専門的な知識の吸収に努める。

課題レポートは、単元ごとに年間6テーマを出題する。

教科書

使用しない。

参考書

講義中に配布

備考

年次	1 年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 大川元久

授業の概要

救急・災害医療において、病院前救急医療分野という立場でその医学的教育や救急・災害医療体制を医療危機管理学の視点で科学的根拠に基づいて実践していくための研究をテーマとして教育・指導していく。対象は医師、看護師、救急救命士等の救急医療に携わる者とする。個別指導研究(20項目)において研究の仮説の立て方から研究デザインを考案し、具体的な論文作成方法の基本を学ぶ。また研究の基礎となる統計分析法の理解と実践にその習得に重きを置く。特にインストラクショナルデザインを基とした医療教授法を身に着ける。

到達目標

救急・災害医学をチーム医療を行うスタッフの一員として研究活動を行い、学術的プレゼンテーションの技術を学び、科学的な学問としての教え方を身に着ける。

評価方法

研究発表成果(60%)、レポート(20%)、口頭試問(20%)

注意事項

研究発表は当該学会発表もしくは論文完成に重きをおいて評価する。

授業計画

回数	内容
第1回	救急医学と災害医学 および 脳外科学を含む 外傷学について
第2回	総論1 医療教授法 インストラクショナルシステムデザイン(ISD)とは
第3回	総論2 BLS、ACLS(ICLS)、ISLS、JPTEC/JNTEC/JATEC etc.
第4回	総論3臨床研究と発表：研究テーマについて（レポート提出）
第5回	口頭試問(総論学習内容の確認):スクーリング
第6回	1．スライドの文字と文 および 箇条書きの問題点
第7回	2．スライドのデザイン 写真と図, グラフのデザイン, 表のデザイン
第8回	3．アニメーション効果
第9回	4．演習：スライド修正
第10回	5．論理的に考える
第11回	6．研究計画：合格のためのポイント
第12回	7．研究目的：疑問点の設定、仮説
第13回	8．研究デザイン（レポート提出2000字以上）
第14回	9．症例報告（ケースレポート）と症例集積（ケースシリーズ）
第15回	これまでの学習内容の小括（口頭試問を含む）：スクーリング
第16回	10．コホート研究と横断研究
第17回	11．後ろ向きコホート研究

回数	内容
第18回	12. 介入研究と観察研究
第19回	13. エビデンス
第20回	14. 統計学
第21回	15. 発表の基本(レポート提出)
第22回	発表形式を学ぶ（口頭試問を含む）：スクーリング
第23回	16. 原稿の棒読み
第24回	17. 研究背景と目的：研究の重要性の主張 および対象と方法：デザインを明確に
第25回	18. 結果：アウトカム...何を観察・測定・計測したか
第26回	19. 考察：結果の解釈
第27回	20. 結論と抄録の書き方
第28回	総括(レポート提出)：スクーリング
第29回	研究発表
第30回	各自の研究の展望を考察する(修了試験を含む)

授業外学習

救急医療系の標準教育プログラムであるBLS、ACLS(ICLS)、PSLS/ISLS、JPTEC/JATEC等に積極的に参加する。また、各種災害訓練やメディカル・ラリーに参加する。

全国レベルの学会・研究会に積極的に参加してもらう（参加費自己負担）。

教科書

上手な教え方の教科書 ～ 入門インストラクショナルデザイン 向後千春 技術評論社 ISBN: 978-4774174617

参考書

インストラクショナルデザインとテクノロジー: 教える技術の動向と課題 鈴木 克明 (監修, 翻訳) 北大路書房(2013/9/28)ISBN:978-4762828188

あなたのプレゼン誰も聞いてませんよ!ーシンプルに伝える魔法のテクニック 渡部欣忍著 南江堂 (2014/4/1)ISBN:978-4-524-26127-7

その他、授業中に紹介する。

備考

救急・災害医療の実践教育演習（HHM48）

通年

Seminar in Disaster and Emergency Medicine

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 大川元久

授業の概要

救急・災害医療において、病院前救急医療分野という立場でその医学的教育や救急・災害医療体制を医療危機管理学的視点で科学的根拠に基づいて実践していくための研究をテーマとして教育・指導していく。対象は医師、看護師、救急救命士等の救急医療に携わる者とする。個別指導研究(20項目)において研究の仮説の立て方から研究デザインを考案し、具体的な論文作成方法の基本を学ぶ。また研究の基礎となる統計分析法の理解と実践にその習得に重きを置く。特にインストラクショナルデザインを基とした医療教授法を身に着ける。特に、その研究テーマを選定した動機・研究対象の背景・現在の課題を明確にします。このレポートから学習者の到達目標と現状とのギャップを埋めるために必要な項目・技術についてスクーリングを実施していきます。

到達目標

救急・災害医学をチーム医療を行うスタッフの一員として研究活動を行い、学術的プレゼンテーションの技術を学び、科学的な学問としての教え方を身に着ける。

評価方法

研究発表成果(60%)、レポート(20%)、口頭試問(20%)

注意事項

研究発表は当該学会発表もしくは論文完成に重きを置いて評価する。随時、SkypeやFaceTimeおよびLINEを用いて通信指導としてe-ラーニングとして実施します。

これらの後に科目修了試験（関連学会等での発表に代用可）をもって単位認定します。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション 救急医学と災害医学 および 外傷学と脳外科学
第2回	医療教授法 インストラクショナルシステムデザイン(ISD)とは
第3回	BLS、ACLS(ICLS)、ISLS、JPTEC/JNTEC/JATEC etc.
第4回	臨床研究と発表：研究テーマについて（研究計画書提出）
第5回	各自でテーマのスライドを作成する
第6回	1．スライドの文字と文 および 箇条書きの問題点を各自作成したもので学ぶ
第7回	2．スライドのデザイン 写真と図, グラフのデザイン, 表のデザインを各自作成したもので学ぶ
第8回	3．アニメーション効果を各自スライドに取り入れる
第9回	4．スライド修正 を実践する
第10回	5．論理的に各自のスライド構成を振り返る
第11回	6．研究発表合格のためのポイントから研究計画を検証する
第12回	7．疑問点の設定、仮説を見直す
第13回	これまでの習得技術でプレゼンテーションを行う
第14回	8．研究デザイン（中間報告書提出）

回数	内容
第15回	9. 症例報告（ケースレポート）と症例集積（ケースシリーズ）
第16回	10. コホート研究と横断研究について調べる
第17回	11. 後ろ向きコホート研究について調べる
第18回	12. 介入研究と観察研究について調べる
第19回	13. 研究テーマに関連する先行研究を収集できるようになる
第20回	14. 統計学の基本を説明できるようになる
第21回	15. 発表の基本(レポート提出)を実践する
第22回	これまでの知識で各自のプレゼンテーションができるようになる。
第23回	16. 原稿の棒読みになっていないかが検証できる
第24回	17. 研究の重要性の主張 および対象と方法とデザインを明確にして振り返る
第25回	18. 結果：アウトカム...何を観察・測定・計測したかについて説明できるようになる
第26回	19. 考察：結果の解釈を説明できる
第27回	20. 結論と抄録の書き方の基本に則り作成する
第28回	総括(最終報告書提出)
第29回	研究発表を行う
第30回	修了試験の実施

授業外学習

救急医療系の標準教育プログラムであるBLS、ACLS(ICLS)、PSLS/ISLS、JPTEC/JATEC等に積極的に参加する。また、各種災害訓練やメディカル・ラリーに参加する。

全国レベルの学会・研究会に積極的に参加してもらう（参加費自己負担）。

教科書

上手な教え方の教科書 ～ 入門インストラクショナルデザイン 向後千春 技術評論社 ISBN: 978-4774174617

参考書

インストラクショナルデザインとテクノロジー: 教える技術の動向と課題 鈴木 克明 (監修, 翻訳) 北大路書房(2013/9/28)ISBN:978-4762828188

あなたのプレゼン誰も聞いてませんよ!ーシンプルに伝える魔法のテクニック 渡部欣忍著 南江堂 (2014/4/1)ISBN:978-4-524-26127-7

その他、授業中に紹介する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	 徳田美智

授業の概要

私たちを取り巻くリスクは、多様化・高度化・複雑化している。これまで経営リスクは、損失の発生可能性を中心に議論されていたが、現在は、企業目標に影響を与える可能性として、マイナスの影響とプラスの影響を検討する必要性が議論されるようになった。本講義では、多様化するリスクに対する対策と組織価値向上のための考え方や手法について修得する。

【アクティブラーニング】事例調査、ディスカッション、プレゼンテーションを予定している。
【フィードバック】】課題（レポート、プレゼンテーション等）に対する講評や省察などの フィードバックを含めた指導を行う。

到達目標

- 1．リスクマネジメントの概念・理論を理解する
- 2．マネジメントプロセスと特徴について、理解する
- 3．効果的なリスクマネジメント導入とその課題について、理解する

評価方法

ディスカッションへの積極的な参加及びレポートにより評価する。
評価は、ディスカッション 4 0 %（到達目標 1 を評価）、レポート 6 0 %（到達目標 2、3 を評価）、の重みで判定する。

注意事項

リスクマネジメントの基礎知識をもっていることがのぞましい。

授業計画

回数	内容
第1回	リスクとリスクマネジメントの変遷 1
第2回	リスクとリスクマネジメントの変遷 2
第3回	現代企業の経営リスク環境
第4回	経営リスクの概念・手法
第5回	企業価値の基本構造とリスク
第6回	リスクの統合・リスクの最適化
第7回	組織目標とリスクマネジメントの連動
第8回	リスクマネジメント・プロセスの特徴
第9回	リスク・コミュニケーション
第10回	リスク情報の開示と企業価値
第11回	リスクマネジメントの企業導入と課題
第12回	海外事例にみる効果的導入
第13回	リスクの理解
第14回	レポート発表 1

回数	内容
第15回	レポート発表 2
第16回	保険・デリバティブ（確率の計算）
第17回	保険・デリバティブ（保険の原理）
第18回	保険・デリバティブ（期待効用仮説）
第19回	保険・デリバティブ（まとめ）
第20回	ファイナンス理論（資本資産価格モデル）
第21回	ファイナンス理論（資本構成）
第22回	ファイナンス理論（企業の投資決定）
第23回	コストと企業価値
第24回	倒産コスト
第25回	資産代替問題
第26回	過少投資問題
第27回	税便益
第28回	リスク回避
第29回	企業のリスクマネジメント（ERM）
第30回	まとめ

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間

予習：受講生との議論を中心に授業を進めるため、事前に十分な時間をかけて予習をしておくこと。

復習：紹介する参考図書・文献にあたり、講義内容をまとめる。課題レポートを作成する

教科書

レジュメを配布する。必要に応じて授業内で指示する

参考書

適宜、授業中に紹介する。

備考

経営リスク演習（HHM77）

通年

Seminar in Management Risk

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2. 0 単位
担当教員	 徳田美智

授業の概要

企業や非営利組織などあらゆる組織は、不確実な状況の中で、複雑化・高度化するリスクに対し多様な意思決定を下さなければならない。この授業では、企業など組織が危機の対処に失敗した事例を取り上げ、その対処についてポイントを整理し、リスク対策の手法について議論する。

【アクティブラーニング】事例調査、ディスカッション、プレゼンテーションを予定している。

【フィードバック】課題（レポート、プレゼンテーション等）に対する講評や省察などの フィードバックを含めた指導を行う。

到達目標

1. 事例研究を通して、多様なリスクに対するマネジメントの手法について理解し、説明できる

評価方法

講義時のディスカッションへの積極的な参加及びレポートにより評価する。評価は、レポート60%、ディスカッション・発表40%（共に到達目標1を評価）の重みで判定する。

注意事項

「経営リスク研究」をあわせて受講することがのぞましい。

授業計画

回数	内容
第1回	イントロダクション
第2回	組織を守る危機管理とは
第3回	経営に関するリスク（リコール事件①）
第4回	経営に関するリスク（リコール事件②）
第5回	マネジメントに関するリスク（セクハラ集団訴訟）
第6回	安全管理に関するリスク（鉄道事故）
第7回	安全管理に関するリスク（放射線事故）
第8回	安全管理に関するリスク（グループホームの火災事故）
第9回	経営に関するリスク（企業の事業継続に向けた危機管理）
第10回	安全管理に関するリスク（自治体の危機管理）
第11回	安全管理に関するリスク（工場の土壌汚染）
第12回	経営に関するリスク（株主代表訴訟①）
第13回	経営に関するリスク（株主代表訴訟②）
第14回	レポート発表 1
第15回	レポート発表2
第16回	安全管理に関するリスク（農薬混入）

回数	内容
第17回	安全管理に関するリスク（目薬への異物混入）
第18回	安全管理に関するリスク（ノロウイルス集団食中毒）
第19回	安全管理に関するリスク（大規模食中毒対応）
第20回	コンプライアンスに関するリスク（健康番組のねつ造）
第21回	コンプライアンスに関するリスク（試験データの改ざん）
第22回	情報漏えいに関するリスク（顧客情報流出）
第23回	経営に関するリスク（金融情報システムの大規模障害発生事件）
第24回	安全管理に関するリスク（ジェットコースターの急停止事故）
第25回	経営リスク対策（現場マニュアルの策定と遵守の徹底）
第26回	経営リスク対策（自然災害を想定したリスクマネジメント）
第27回	経営リスク対策（情報セキュリティポリシーの策定）
第28回	経営リスク対策（保険の活用）
第29回	経営リスク対策（従業員のマネジメント）
第30回	まとめ

授業外学習

学習時間の目安：合計30時間
予習：受講生との議論を中心に授業を進めるため、事前に十分な時間をかけて予習をしておくこと。
復習：紹介する参考図書・文献にあたり、講義内容をまとめる。
課題レポートを作成する

教科書

レジュメを配布する。必要に応じて授業内で指示する

参考書

適宜、授業中に紹介する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	4． 0 単位
担当教員	 村山公保

授業の概要

情報リスクを考える上での基礎となる情報セキュリティとその安全性について幅広い視点から学ぶ。具体的には暗号技術、認証、バイオメトリック、サイバーセキュリティ、情報セキュリティマネジメントシステム、デジタルフォレンジック、法と倫理等について、発表と討論を通して学ぶ。

到達目標

1. 情報セキュリティについて幅広い観点から理解し、情報リスクについて他人と議論するための土台を構築する。

評価方法

・レポート60%(到達目標の1を評価)、定期試験40%(到達目標の1を評価)の重みで判定する。優秀なものがより実力を高められるように、特別課題と発表で評価する場合もある。

注意事項

・まとめてきた資料は最終的にはレポートとして提出する。

授業計画

回数	内容
第1回	情報セキュリティの概要
第2回	暗号技術の基礎
第3回	暗号技術-共通鍵暗号-(1)共通鍵暗号技術
第4回	暗号技術-共通鍵暗号-(2)安全性
第5回	暗号技術-公開鍵暗号-(1)公開鍵暗号技術
第6回	暗号技術-公開鍵暗号-(2)デジタル署名と認証、安全性
第7回	デジタル署名とPKI(1)認証とは
第8回	デジタル署名とPKI(2)PKIの応用分野
第9回	セキュア実装(1)セキュアプロトコル
第10回	セキュア実装(2)ハードウェア実装
第11回	情報ハイディング技術(1)情報ハイディングとは
第12回	情報ハイディング技術(2)情報ハイディングの今後
第13回	バイオメトリック(1)バイオメトリクスとは
第14回	バイオメトリック(2)IoT・AI・ビッグデータ、FIDO
第15回	サイバーセキュリティ技術(1)サイバーセキュリティの概要
第16回	サイバーセキュリティ技術(2)攻撃と防御の考え方
第17回	サイバーセキュリティ技術(3)最新の技術動向
第18回	情報セキュリティマネジメントシステム(ISMS)および情報セキュリティ監査(1)ISMSとは

回数	内容
第19回	情報セキュリティマネジメントシステム(ISMS)および情報セキュリティ監査(2)ISMS に関連する国内制度
第20回	CC(ISO/IEC15408)と情報システムセキュリティ対策の設計・実装(1)CCの概要
第21回	CC(ISO/IEC15408)と情報システムセキュリティ対策の設計・実装(2)CC策定の歴史と国内制度
第22回	個人情報保護技術(1)個人情報とプライバシー
第23回	個人情報保護技術(2)各国、国際機関における個人情報保護の動向
第24回	デジタルフォレンジック技法(1)デジタルフォレンジック技法の概要
第25回	デジタルフォレンジック技法(2)フォレンジック技法の応用
第26回	IoTセキュリティ(1)IoTとはなにか
第27回	IoTセキュリティ(2)IoTセキュリティの課題
第28回	法と倫理(1)情報セキュリティと法
第29回	法と倫理(2)情報セキュリティと倫理
第30回	まとめ

授業外学習

学習時間の目安：合計120時間

- ・この講義は、受講生との議論を中心に授業を進めるため、事前に十分な時間をかけて予習を行い、学んだことを資料にまとめてくること。
- ・日頃から情報セキュリティや情報リスクについて意識するようにする。

教科書

瀬戸洋一、佐藤尚宜、越前功、中田亮太郎、織茂昌之、長谷川久美、渡辺慎太郎、小檜山智久、村上康二郎著、「改訂版 情報セキュリティ概論」、日本工業出版、2019、978-4-8190-3103-5

参考書

井上直也、村山公保、竹下隆史、荒井透、荻田幸雄「マスタリングTCP/IP 入門編 第6版」、オーム社、2019、978-4-274-22447-8

備考

情報リスク演習（HHM73）

通年

Seminar in Information Risk

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 村山公保

授業の概要

情報リスクを考える上での経験値を高めるため、コンピュータシステムの構築と設定を行い、ペネトレーションを行う。具体的には仮想環境上にWindows、Linux(KaliLinux)環境を構築し、コンピュータシステムの機密性、完全性、可用性を脅かす行為について、実機を使った演習を行いながら、理解を深める。

到達目標

1. コンピュータシステム上に演習環境を構築できる
2. 各種の攻撃手法について理解を深める。

評価方法

・レポート60%(到達目標の1、2を評価)、定期試験40%(到達目標の2を評価)の重みで判定する。優秀なものがより実力を高められるように、特別課題と発表で評価する場合もある。

注意事項

・仮想環境(VirtualBox等)が動作するノートパソコンを持参すること。

授業計画

回数	内容
第1回	講義概要
第2回	ハッキング・ラボとは
第3回	仮想環境とは、VirtualBoxのインストール
第4回	VirtualBoxの基本設定、VirtualBoxにKali Linuxを導入する
第5回	初めてのKali Linux
第6回	Kali Linuxのカスタマイズ
第7回	ファイルの探し方、Kaliにおけるインストールテクニック
第8回	いつでもどこでも調べもの、エイリアスを活用する
第9回	ファイルの拡張子を表示する、ファイルやフォルダーの隠し属性を解除する
第10回	コントロールパネルをすぐを開けるようにする、スタートメニューの主要リンクをカスタマイズする
第11回	メインPCのフォルダー構成を考える、ホストOSとゲストOS間でファイルをやり取りする
第12回	VirtualBoxのファイル共有機能を利用する、メインPCの共有設定を見直す
第13回	Windows Updateを管理する、アンチウイルスの設定を見直す
第14回	AutoPlayの設定を確認する、共有フォルダーの"Thumbs.db"の作成を抑止する
第15回	右クリックのショートカットメニューをカスタマイズする、ストレージ分析ソフトで無駄なファイルを洗い出す
第16回	ランチャーを導入する、ハッキング・ラボにおけるGit
第17回	クラウドストレージの活用、Prefetch機能を有効にする

回数	内容
第18回	WindowsにPython環境を構築する、BIOS（UEFI）画面を表示する
第19回	Windowsのハッキング(Windows 7のハッキング)
第20回	Windowsのハッキング(Windows 10のハッキング)
第21回	Metasploitableのハッキング(MetasploitableでLinuxのハッキングを体験する)
第22回	Metasploitableのハッキング(Metasploitableを攻撃する)
第23回	Metasploitableのハッキング(Netcatを用いた各種通信の実現)
第24回	LANのハッキング(有線LANのハッキング)
第25回	LANのハッキング(無線LANのハッキング)
第26回	学習用アプリによるWebアプリのハッキング(DVWAでWebアプリのハッキングを体験する)
第27回	学習用アプリによるWebアプリのハッキング(bWAPP bee-boxでWebアプリのハッキングを体験する)
第28回	ログオン認証のハッキング(Sticky Keys機能を悪用したログオン画面の突破)
第29回	ログオン認証のハッキング(レジストリ書き換えによるバックドアの実現)
第30回	まとめ

授業外学習

学習時間の目安：合計30時間

- ・実験環境を構築し、試してくる。
- ・パソコンの操作などでつまづいた場合には、インターネットで検索して試しながら探り当てるようにする。

教科書

IPUSIRON著、「ハッキング・ラボのつくりかた 仮想環境におけるハッカー体験学習」、翔泳社、978-4798155302

参考書

井上直也、村山公保、竹下隆史、荒井透、苅田幸雄「マスタリングTCP/IP 入門編 第6版」、オーム社、2019、978-4-274-22447-8

備考

生活習慣病予防演習（HHM71）

通年

Seminar in Lifestyle-related Diseases Prevention

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 吉田悦男

授業の概要

生活習慣病予防には多岐にわたるアプローチが存在する。それぞれのアプローチにおける考え方、研究手法を知り、いかなる知見が得られているかを検討する。さらに生活習慣病の成因、発症機序を理解したうえで、理論に基づく効果的予防法を考案し、自らその方法を実践し、その過程、効果を検証する。

到達目標

生活習慣病の予防に関して他者に説明でき、さらに自分の意見も言えるレベルの力を身につける。

評価方法

発表（70％）、討論参加（30％）として総合評価する。

注意事項

自ら資料を探し出す能力も高めてもらいたい。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	生活習慣病の概要
第3回	生活習慣病発症機序 1 総論
第4回	生活習慣病発症機序 2 肥満
第5回	生活習慣病発症機序 3 高脂血症
第6回	生活習慣病発症機序 4 高血圧
第7回	生活習慣病発症機序 5 高血糖
第8回	生活習慣病発症機序 6 動脈硬化
第9回	生活習慣病発症機序 7 がん
第10回	生活習慣病発症機序 8 歯周病
第11回	生活習慣病発症機序 9 糖尿病
第12回	死の四重奏
第13回	生活習慣病予防法の現状 1 食塩と高血圧
第14回	生活習慣病予防法の現状 2 肥満と減量
第15回	生活習慣病予防法の現状 3 運動と高血圧
第16回	生活習慣病予防法の現状 4 アルコール摂取と血圧
第17回	生活習慣病予防法の現状 5 食事と脂質
第18回	生活習慣病予防法の現状 6 肥満と動脈硬化

回数	内容
第19回	生活習慣病予防法の現状 7 運動と脂質
第20回	生活習慣病予防法の現状 8 喫煙と動脈硬化
第21回	生活習慣病予防法の考案 1 血圧関連 1
第22回	生活習慣病予防法の考案 2 血圧関連 2
第23回	生活習慣病予防法の考案 3 脂質改善 1
第24回	生活習慣病予防法の考案 4 脂質改善 2
第25回	生活習慣病予防法の考案 5 糖尿病予防 1
第26回	生活習慣病予防法の考案 6 糖尿病予防 2
第27回	生活習慣病予防法の考案 7 患者教育 1
第28回	生活習慣病予防法の考案 8 患者教育 2
第29回	今後の展望
第30回	総括質疑

授業外学習

学習時間の目安：合計30時間

毎回討論のための予備学習をしておくこと。最新の英語論文を国際ジャーナルから自ら検索、入手し読解、吟味しておく。

教科書

使用しない。

参考書

参考文献は適宜案内する。

備考

健康と食生活演習（HHM74）

通年

Seminar in Health and Eating habit

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 矢田貝智恵子

授業の概要

健康管理に関わる基本的な機器の操作、測定方法、データ解析方法を習得し、定期的に計測することで、自己の健康管理、身体づくりを行う。

健康増進・スポーツ時などにおける健康管理の方法などを調査、分析し、その結果に基づいて実験・研究計画の立案、実施、評価、判定を行う能力を養う。

健康分野の高度な専門知識と技能を身につけ、健康生活に関する様々な問題点を、学術的な立場に立って解決できる人材の育成を目指す。

到達目標

- 1 体成分分析や骨密度測定などの操作ができ、結果を評価することができる。
- 2 日常生活の中で自己の健康状態を把握するにはどのようにするかを理解し、説明できる。
- 3 健康増進・スポーツ時などにおける健康管理の方法を学び、説明できる。
- 4 健康管理について、調査・分析し、その結果に基づいて実験・研究計画の立案、実施、評価、判定を行うことができる。

評価方法

機器操作20%（到達目標1）、分析結果の判定および評価30%（到達目標2～4）、レポート50%（到達目標4）に基づいて総合的に評価する。

注意事項

- ・講義「食生活と健康の研究」を履修のこと。
- ・定期的に進捗状況を報告すること。

授業計画

- 第1週 オリエンテーション
- 第2週 体成分分析装置の説明および機器操作
- 第3週 体成分分析の結果および評価
- 第4週 ディスカッションおよびレポート提出
- 第5週 骨密度測定機器の説明および機器操作
- 第6週 骨密度測定結果および評価
- 第7週 ディスカッションおよびレポート提出
- 第8週 血液成分分析機器の説明および機器操作
- 第9週 血液成分分析結果および評価
- 第10週 ディスカッションおよびレポート提出
- 第11週～第14週 テーマと調査・実験方法の設定
- 第15週～第25週 調査・実験および文献講読
- 第26週～第29週 実験・研究のまとめおよびレポート作成
- 第30週 レポート提出およびディスカッション

授業外学習

学習時間の目安：合計30時間

- ・定期的に体成分分析を行い、毎日の生活の中で、健康の維持増進のための事項を実践する。
- ・関連する情報を得るため、学内外の図書館などを利用し、文献収集を行うなど、レポート作成に取り組む。

教科書

なし

参考書

適宜紹介・配布する。

備考

環境と健康生活演習（HHM68）

通年

Seminar in Environment and Healthy life

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2. 0単位
担当教員	湯川尚一郎

授業の概要

人と動物の健康生活は、自然環境（空気、水、土壌等）や生活環境（水道、生活污水、ごみ、食生活等）・労働環境（化学物質・騒音等有害因子の曝露等）あるいは社会環境（健康施策・保健医療福祉制度等）と大きく関わっている。すなわち、健康の成り立ちは“環境との相互作用”であるという理解の下、人と動物が健康に生活していく上での阻害要因や促進要因に関して各自関心のあるテーマを取り上げ、「問題の発見」→「情報の収集」→「仮説の設定」→「仮説の検証」→「レポート作成」の過程を実践する。

到達目標

1. 各自関心のあるテーマを取り上げ、「問題の発見」→「情報の収集」→「仮説の設定」→「仮説の検証」→「レポート作成」の過程を実践し、科学的根拠に基づいたレポートにまとめ、科学的思考態度を修得する。

評価方法

進捗状況を提出物でチェックし、最終的に提出されたレポートを基に評価を行う。提出物の配点40%（達成目標1を評価）、レポート（達成目標1を評価）を基に最終評価を行う。

注意事項

レポート作成にあたって、先行研究を十分把握した上で取り掛かること。

授業計画

【テーマの設定（仮説の設定）】

- 1週目：文献等の収集（1）医中誌を中心に
- 2週目：文献等の収集（2）pubmedを中心に
- 3週目：現状の把握（1）国内文献から
- 4週目：現状の把握（2）海外文献から
- 5週目：問題点の整理
- 6週目：目的の明確化
- 7週目：各種細胞の培養法の習得
- 8週目：仮説の設定

【仮説の検証】

- 9週目：対象・方法の検討（1）過去の文献から
- 10週目：対象・方法の検討（2）本学の設備から
- 11週目：対象・方法の検討（3）対応可能な方法の提案
- 12週目：実験への準備（1）機器備品の確認
- 13週目：実験への準備（2）消耗品等の確認
- 14週目：実験（1）実験機材の安全確認
- 15週目：実験（2）実験機材の使用準備
- 16週目：実験（3）消耗品の準備・作成
- 17週目：実験（4）愛玩動物用飼料等の検査法・選択培養まで
- 18週目：実験（5）愛玩動物用飼料等の検査法・分離培養まで
- 19週目：実験（6）愛玩動物用飼料等の検査法・菌種同定まで
- 20週目：実験（7）BAM法・選択培養まで
- 21週目：実験（8）BAM法・分離培養まで
- 22週目：実験（9）BAM法・菌種同定まで
- 23週目：実験（10）遺伝子検査・同定菌の保存

【レポート作成・提出】

24週目：データの整理（1）同定菌の確認

25週目：データの整理（2）遺伝子検査

26週目：データの整理（3）BLAST等データベースとの照合

27週目：データの整理（4）MLST等データベースとの照合

28週目：レポート作成（1）菌種について

29週目：レポート作成（2）遺伝子検査について

30週目：レポート校正・提出

授業外学習

学習時間の目安：30時間

予習：教科書の該当ページを読んで概略を掴む。

復習：過去の文献を探し、読むことで学びの内容を深めるようにすること。

進捗状況の報告を求めるので、整理しておくこと。

教科書

職場の健康がみえる 産業保健の基礎と健康経営 | 泉 博之ら監修 | メディックメディア社 | ISBN978-4-89632-782-3

公衆衛生がみえる 2018-2019 | 石川 雅俊ら監修 | メディックメディア社 | ISBN978-4-89632-687-1

参考書

適宜指示する

備考

食糧生産生態学演習（HHM67）

通年

Seminar in Crop-production Ecology

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2. 0 単位
担当教員	 内藤 整

授業の概要

太陽エネルギーを固定して有機物を産出する耕地はソーラーパネルの働きをしている。そのために人間が利用している植物が作物であり、人間の生命・生活を支えている。人口増加と気候変動によって食糧不足が懸念される今日では、様々な地域環境の中で十分に作物の機能を発揮させることが重要である。この実験では植物の機能を解明するため、材料の育成方法や機能測定方法について学ぶ。

到達目標

- 1.各自が取り上げた課題についての研究論文を探して入手できる。
- 2.実験植物を栽培・管理できる。
- 3.植物の生育や収量を測定し、その原因を明らかにできる。

評価方法

受講態度などの平常点40%（到達目標2を評価）とレポート60%（到達目標1,3を評価）により評価を行う。

注意事項

動きやすく安全な服装で受講すること。

授業計画

実験上の注意

実験計画の策定

文献調査と議論（1）図書館の利用

文献調査と議論（2）インターネット検索

文献調査と議論（3）論文紹介

実験植物の育成（1）種子予措

実験植物の育成（2）土壌準備

実験植物の育成（3）播種

実験植物の育成（4）培養液の作成

生育調査 実験レポート「イネの成長解析」

光合成の測定

光合成色素の定量 実験レポート「異なる培養液濃度で育成したイネのクロロフィル含量」

受光日射量の推定

収量調査 1.草丈と乾物重

収量調査 2. 1 株穂数と 1 穂粒数

収量調査 3. 粒収量と千粒重 実験レポート「異なる圃場で生育するイネの収量比較」

フィールド調査（1）自然観察

フィールド調査（2）植物生態

フィールド調査（3）植物の生育環境

フィールド調査（4）植物の発育

フィールド調査（5）開花結実

植物成分分析（1）粉碎と秤量

植物成分分析（2）灰化

植物成分分析（3）イオンクロマトグラフィーによる陽イオン測定

植物成分分析（3）イオンクロマトグラフィーによる陰イオン測定

植物の形態調査（1）光学顕微鏡を用いた組織観察

植物の形態調査（2）気孔密度の測定

植物の形態調査（3）走査電子顕微鏡観察
植物の形態調査（4）画像解析による根系調査
実験結果の発表

授業外学習

- ・文献調査を行って現状の課題を整理する（5時間）。
 - ・植物の栽培管理を行い、植物に対する観察眼を養う（10時間）。
 - ・実験の内容を記録し、レポートにまとめる（5時間×3課題）。
-

教科書

使用しない。

参考書

北條良夫他編「最新作物生理実験法」農業技術協会、東京大学大学院農学生命科学研究科生産・環境生物学専攻編「〔実験〕生産環境生物学」朝倉書店他、適宜案内する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	4． 0 単位
担当教員	 川添敏弘

授業の概要

動物というフィルターを通して、福祉、医療、心理、生活など様々な分野を見つめると様々な学術的な視点を得ることができる。それが人間動物関係学である。授業では、「動物行動学」「障害者福祉」「高齢者福祉」「動物福祉」をキーワードにして様々な分野から学習する。

到達目標

1. 子どもの発達と環境の重要性を理解できる。
2. 福祉環境への心理的支援を理解できる。
3. 人間動物関係学の重要性を理解する。
4. 動物が存在する環境について理解する。
5. ボランティアや地域連携について理解する。

評価方法

講義時の討論や質疑応答（30%）、レポート（70%）で評価する（到達目標 1 ～5を評価）。

注意事項

環境と生命について広く理解していくことを目標とする。講義中にしっかりとノートをとること。
レポートにおいては、課題で示された内容に答えるだけでなく、最新のニュースとの関連を含め自らの考え・見解・感想を含めること。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 幼児期の環境教育（子どもの発達）
3. 幼児期の環境教育（子どもと環境）
4. 幼児期の環境教育（子どもと動物）
5. 小学校での環境教育（理科・社会・道徳）
6. 学校飼育動物と動物介在教育
7. 発達障害と環境
8. 小中学校での心理的援助と環境
9. 高校大学での心理的援助と環境
10. 行動を科学する学習理論
11. 精神疾患患者への援助と環境
12. 知的障害者への援助と環境
13. 動物の行動と環境（基礎）
14. 動物の行動と環境（応用）
15. イヌのトレーニングと学習理論
16. 認知症患者と環境
17. ボランティアと地域連携
18. ヒトと動物の関係の歴史と研究
19. 動物介在活動
20. 動物介在療法と動物介在介入
21. 知的障害者への動物介在介入
22. 企業経営での動物介在介入の取り組み
23. 発達障害者に向けたイヌの育て方
24. ペットロス・安楽死
25. 動物福祉と倫理と食文化

26. ペットビジネス、動物愛護
 27. ビオトープと環境教育
 28. 地域を活性化する環境デザイン
 29. ESDの現状と課題／レポート提出
 30. まとめと質疑
-

授業外学習

予習：教科書の指定されたページを読んでくる。

復習：講義内容をまとめ、課題を提出する。

(各回予習復習を計4時間)

実際にボランティアや地域イベントに参加することで、学びの内容を深めるようにする。さらに、メディアからの情報を切り抜きノートにまとめたりレポートにして、それについてディスカッションする機会をつくっていく。

教科書

知りたい！やってみたい！アニマルセラピー（2014）川添敏弘（編筆）駿河台出版社

ISBN978-4-411-04030-5

参考書

適宜案内する

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 川添敏弘

授業の概要

人間動物関係学のテーマに深く取り組んでいくことを目標とする。

人間動物関係学は分野をまたがり、融合し、新たな分野がつくられてきた。本授業でも、医学、心理学、福祉学、動物行動学、社会福祉学、地域コミュニティ学などについて幅広く学んでいく。講義ではワークショップやアクティビティを行いながら実施していく。振り返りの中で多様な環境の重要性を理解し、他者を支援することや地域連携を行う力を身に付けていく

この演習では、特に「ドッグトレーニング」と「動物介在介入」について学びながら科学的視点を持った知識を身に付けていく。

到達目標

人間動物関係学に関するテーマを研究視点でみることができるようになる。

1. 地域を取り巻く社会福祉における課題を理解する
2. 子どもに必要な環境を理解する
3. 自分のことを理解する
4. 地域活動を理解する
5. 地域活動の立案、計画ができるようになる

評価方法

講義時の討論や質疑応答（30%）、レポート（40%）、プレゼン内容（30%）により成績を評価し（到達目標1～5を評価）、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

環境と生命について広く理解していくことを目標とする。

講義でのワークショップ等に積極的に参加すること。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 高齢者施設での傾聴ボランティア
3. アニマルセラピーの始め方
4. イヌのハンドリング
5. 犬のトレーニング（基礎）
6. 犬のトレーニング（散歩）
7. 犬のトレーニング（問題行動の制御）
8. 犬のトレーニング（拮抗条件付け）
9. 動物介在活動（活動準備）
10. 動物介在活動（認知症）
11. 動物介在活動（レクリエーション）
12. 動物介在活動（アニマルセラピー）
13. 動物介在教育（活動準備）
14. 動物介在教育（幼稚園訪問）
15. 動物介在教育（活動計画）
16. 動物介在教育（アニマルセラピー）
17. 動物介在教療法
18. 動物介在介入（活動準備）
19. 動物介在介入（知的障害者での活動）
20. 動物介在介入（知的障害者の行動の問題「受動」）

21. 動物介在介入（知的障害者の行動の問題「粗暴」）
 22. 自分を知る心理テスト
 23. 芸術療法の理論と体験
 24. コラージュの体験と発表
 25. 子どものあそび（導入・仲間づくり・折り合う）
 26. 子どもと工作（満足できる工作）
 27. 動物園・水族館の歩き方（計画と準備）
 28. 動物園・水族館の歩き方（活動）
 29. 動物園・水族館の歩き方（振り返り）
 30. プレゼン発表、まとめと質疑
-

授業外学習

できるだけ多くの本や論文を読み、研究の理論的背景、研究法、今後の課題を理解する。

予習：指定された課題を読んでくる。

復習：講義内容や活動をまとめ、課題を提出する。

教科書

使用しない、講義の中で資料を配布する。

参考書

適宜案内する

備考

環境リスク演習（HHM79）

通年

Seminar in Environmental Risk

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 妹尾護

授業の概要

水道水、河川水、地下水の水質調査、河川の底質、瀬戸内海の底質等の土壌調査を通して、サンプリング方法や分析試料についての機器分析方法を習得する。また、得られたデータについて、解析・考察・まとめを行い、レポートを作成する。

到達目標

- 1 水質汚染や土壌汚染に関する調査方法、また機器による分析方法を理解する。
- 2 調査、分析によって得られたデータの解析・考察を行い、環境科学分野のレポートとしてまとめることができる。

評価方法

調査、実験等に取り組む態度・姿勢 3 0 %（到達目標 1 を評価）、レポート 7 0 %（到達目標 1、2 を評価）により成績評価を行う。

注意事項

レポートの進展に応じて、中間発表を行う。土曜日、日曜日に野外調査を行う場合がある。

授業計画

回数	内容
第1回	前期の演習についてのオリエンテーション
第2回	水質汚染に関する説明
第3回	水道水の水質測定についての説明
第4回	河川水の水質測定についての説明
第5回	地下水の水質測定についての説明
第6回	各分析項目の測定方法の説明
第7回	機器の使用方法的説明－ 1（導電率計、pHメーター、吸光度分析計、溶存酸素測定器等）
第8回	機器の使用方法的説明－ 2（イオンクロマトグラフ）
第9回	水道水の試料採取
第10回	河川水の試料採取
第11回	地下水の試料採取
第12回	水質測定－ 1（導電率、pH、溶存ケイ酸、溶存酸素等）
第13回	水質測定－ 2（陽イオン、陰イオン）
第14回	分析結果のまとめ
第15回	前期レポートのまとめ
第16回	後期の演習についてのオリエンテーション
第17回	土壌汚染に関する説明
第18回	河川の底質の元素分析についての説明

回数	内容
第19回	瀬戸内海の底質の元素分析についての説明
第20回	道路脇粉塵の元素分析についての説明
第21回	各分析項目の測定方法の説明
第22回	機器の使用方法の説明（蛍光X線分析装置）
第23回	河川の底質の採取
第24回	瀬戸内海の提出の採取
第25回	道路脇粉塵の採取
第26回	試料の乾燥・粉碎等
第27回	元素分析－ 1（蛍光X線分析）
第28回	元素分析－ 2（蛍光X線分析）
第29回	分析結果のまとめ
第30回	後期レポートの作成

授業外学習

学習時間の目安 ： 各回1時間、合計30時間

前回の授業内容について復習するとともに、配布プリント等により、時価の授業内容を確認し、その範囲の専門用語の意味をしらべて理解しておくこと。

教科書

配布プリントを使用する。（教科書は使用しない）

参考書

授業中に適宜紹介する。

備考

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	4． 0 単位
担当教員	 武光浩史

授業の概要

生命活動の基本は遺伝子発現とタンパクへの翻訳で行われている。この講義では小動物の様々な疾病の診断と治療を分子生物学的なアプローチで解析、研究を行うのに必要な知識を習得する。

到達目標

分子生物学の基礎を理解し、研究計画を立案できるようになる

評価方法

講義時の討論・質疑応答及びプレゼンテーションにより評価する。評価はプレゼンテーション 8 0 %、質疑応答 2 0 %の重みで判定する。

注意事項

原則として課題提出の期限は厳守とする。

授業計画

【授業計画】

- 1週目：オリエンテーション
- 2週目：基礎遺伝学（1）：遺伝子の構成
- 3週目：基礎遺伝学（2）：セントラルドグマ
- 4週目：基礎遺伝学（3）：メンデル遺伝
- 5週目：基礎遺伝学（4）：遺伝子変異
- 6週目：遺伝子の実験（1）：PCR
- 7週目：遺伝子の実験（2）：リアルタイムPCR
- 8週目：遺伝子の実験（3）：リアルタイムPCRの応用
- 9週目：遺伝子の実験（4）：大腸菌を使った遺伝子の組み換え
- 10週目：遺伝子の実験（5）：ウイルスを使った遺伝子の組み換え
- 11週目：遺伝子の実験（6）：物理化学的な遺伝子の組み換え
- 12週目：遺伝子の実験（7）：DNAシーケンス
- 13週目：タンパク質の実験（1）：タンパク質の基礎知識
- 14 週目：タンパク質の実験（2）：ELISA
- 15週目：タンパク質の実験（3）ウエスタンブロット法
- 16週目：タンパク質の実験（4）その他の解析法
- 17週目：フローサイトメトリー（1）原理
- 18週目：フローサイトメトリー（2）細胞表面マーカーの評価
- 19週目：フローサイトメトリー（3）細胞内蛋白の評価
- 20週目：細胞培養（1）株化細胞
- 21週目：細胞培養（2）初代培養
- 22週目：細胞培養（3）培養条件
- 23週目：細胞培養（4）培養細胞の評価
- 24週目：まとめ
- 25週目：総合研究（1）
- 26週目：プレゼンテーション（1）
- 27週目：論文作成
- 28週目：プレゼンテーション（2）
- 29週目：論文作成

30週目：今後の展望

授業外学習

英語論文をまとめ、プレゼンテーションを定期的に行う。120時間を目安に学習を行う

教科書

原則としてプリントを配布する。必要に応じて授業内で指示する。

参考書

適宜、授業中に紹介する。

備考

動物臨床生化学演習（HHM82）

通年

Seminar in Animal Clinical Biochemistry

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 武光浩史

授業の概要

動物看護領域の臨床研究においても分子生物学的な手法は必須である。本演習では動物からの検体採取といった基本的な方法から遺伝子組み換えにまで至る応用的な実験手法までを幅広く習得してもらう。

到達目標

- 1.研究計画を立案できる
- 2.研究法を理解できる
- 3.データを論文形式にまとめることができる

評価方法

到達目標に沿った質疑応答とレポートで総合的に評価を行う（質疑応答20%、レポート80%）

注意事項

内容により数日間連続して演習を行うこともある。

授業計画

【授業計画】

- 1週目：オリエンテーション
- 2週目：文献検索
- 3週目：動物からの検体採取
- 4週目：検体の取り扱い・処理法
- 5週目：DNA抽出
- 6週目：RNA抽出
- 7週目：タンパク抽出法
- 8週目：データベースの使用法
- 9週目：プライマー設計
- 10週目：遺伝子増幅法
- 11週目：制限酵素
- 12週目：プラスミド
- 13週目：コンピテントセルの遺伝子組み換え
- 14週目：DNAシークエンス法
- 15週目：タンパク質の定量
- 16週目：ELISA法
- 17週目：ウエスタンブロット法
- 18週目：質疑応答・レポート提出
- 19週目：細胞培養法
- 20週目：初代培養
- 21週目：株化培養
- 22週目：培養細胞の遺伝子組み換え
- 23週目：培養細胞からの遺伝子抽出
- 24週目：培養細胞からのタンパク抽出
- 25週目：免疫染色
- 26週目：フローサイトメトリー法
- 27週目：論文作成

28週目：論文作成
29週目：プレゼンテーション
30週目：レポート提出・総括質疑

授業外学習

与えられたテーマに沿った論文を読む。30時間を目安に学習を行う。

教科書

原則としてプリントを配布する。必要に応じて授業内に指示する。

参考書

適宜紹介する。

備考

救急・災害医療の研究（HHM78）

通年

Research on Disaster and Emergency Medicine

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	4．0 単位
担当教員	👤 大川元久

授業の概要

救急・災害医療において、病院前救急医療分野という立場でその医学的教育や救急・災害医療体制を医療危機管理学的視点で科学的根拠に基づいて実践していくための研究をテーマとして教育・指導していく。対象は医師、看護師、救急救命士等の救急医療に携わる者とする。個別指導研究(20項目)において研究の仮説の立て方から研究デザインを考案し、具体的な論文作成方法の基本を学ぶ。また研究の基礎となる統計分析法の理解と実践にその習得に重きを置く。特にインストラクショナルデザインを基とした医療教授法を身に着ける。

到達目標

救急・災害医学をチーム医療を行うスタッフの一員として研究活動を行い、学術的プレゼンテーションの技術を学び、科学的な学問としての教え方を身に着ける。

評価方法

研究発表成果(60%)、レポート(20%)、口頭試問(20%)

注意事項

研究発表は当該学会発表もしくは論文完成に重きをおいて評価する。

授業計画

回数	内容
第1回	救急医学と災害医学 および 脳外科学を含む 外傷学について
第2回	総論1 医療教授法 インストラクショナルシステムデザイン(ISD)とは
第3回	総論2 BLS、ACLS(ICLS)、ISLS、JPTEC/JNTEC/JATEC etc.
第4回	総論3臨床研究と発表：研究テーマについて（レポート提出）
第5回	口頭試問(総論学習内容の確認)
第6回	1．スライドの文字と文 および 箇条書きの問題点
第7回	2．スライドのデザイン 写真と図, グラフのデザイン, 表のデザイン
第8回	3．アニメーション効果
第9回	4．演習：スライド修正
第10回	5．論理的に考える
第11回	6．研究計画：合格のためのポイント
第12回	7．研究目的：疑問点の設定、仮説
第13回	8．研究デザイン（レポート提出2000字以上）
第14回	9．症例報告（ケースレポート）と症例集積（ケースシリーズ）
第15回	これまでの学習内容の小括（口頭試問を含む）
第16回	10．コホート研究と横断研究
第17回	11．後ろ向きコホート研究

回数	内容
第18回	12. 介入研究と観察研究
第19回	13. エビデンス
第20回	14. 統計学
第21回	15. 発表の基本(レポート提出)
第22回	発表形式を学ぶ (口頭試問を含む)
第23回	16. 原稿の棒読みになっていないか検証する
第24回	17. 研究背景と目的：研究の重要性の主張 および対象と方法：デザインを明確に
第25回	18. 結果：アウトカム...何を観察・測定・計測したか
第26回	19. 考察：結果の解釈
第27回	20. 結論と抄録の書き方
第28回	総括(レポート提出)
第29回	研究発表
第30回	研究発表

授業外学習

救急医療系の標準教育プログラムであるBLS、ACLS(ICLS)、PSLS/ISLS、JPTEC/JATEC等に積極的に参加する。また、各種災害訓練やメディカル・ラリーに参加する。

全国レベルの学会・研究会に積極的に参加してもらう（参加費自己負担）。

教科書

上手な教え方の教科書 ～ 入門インストラクショナルデザイン 向後千春 技術評論社 ISBN: 978-4774174617

参考書

インストラクショナルデザインとテクノロジー: 教える技術の動向と課題 鈴木 克明 (監修, 翻訳) 北大路書房(2013/9/28)ISBN:978-4762828188

あなたのプレゼン誰も聞いてませんよ!ーシンプルに伝える魔法のテクニック 渡部欣忍著 南江堂 (2014/4/1)ISBN:978-4-524-26127-7

その他、授業中に紹介する。

備考

救急・災害医療演習（HHM80）

通年

Seminar in Disaster and Emergency Medicine

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 大川元久

授業の概要

救急・災害医療において、病院前救急医療分野という立場でその医学的教育や救急・災害医療体制を医療危機管理学的視点で科学的根拠に基づいて実践していくための研究をテーマとして教育・指導していく。対象は医師、看護師、救急救命士等の救急医療に携わる者とする。個別指導研究(20項目)において研究の仮説の立て方から研究デザインを考案し、具体的な論文作成方法の基本を学ぶ。また研究の基礎となる統計分析法の理解と実践にその習得に重きを置く。特にインストラクショナルデザインを基とした医療教授法を身に着ける。特に、その研究テーマを選定した動機・研究対象の背景・現在の課題を明確にします。このレポートから学習者の到達目標と現状とのギャップを埋めるために必要な項目・技術についてスクーリングを実施していきます。

到達目標

救急・災害医学をチーム医療を行うスタッフの一員として研究活動を行い、学術的プレゼンテーションの技術を学び、科学的な学問としての教え方を身に着ける。

評価方法

研究発表成果(60%)、レポート(20%)、口頭試問(20%)

注意事項

研究発表は当該学会発表もしくは論文完成に重きを置いて評価する。随時、SkypeやFaceTimeおよびLINEを用いて通信指導としてe-ラーニングとして実施します。

これらの後に科目修了試験（関連学会等での発表に代用可）をもって単位認定します。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション 救急医学と災害医学 および 外傷学と脳外科学
第2回	医療教授法 インストラクショナルシステムデザイン(ISD)とは
第3回	BLS、ACLS(ICLS)、ISLS、JPTEC/JNTEC/JATEC etc.
第4回	臨床研究と発表：研究テーマについて（研究計画書提出）
第5回	各自でテーマのスライドを作成する
第6回	1．スライドの文字と文 および 箇条書きの問題点を各自作成したもので学ぶ
第7回	2．スライドのデザイン 写真と図, グラフのデザイン, 表のデザインを各自作成したもので学ぶ
第8回	3．アニメーション効果を各自スライドに取り入れる
第9回	4．スライド修正 を実践する
第10回	5．論理的に各自のスライド構成を振り返る
第11回	6．研究発表合格のためのポイントから研究計画を検証する
第12回	7．疑問点の設定、仮説を見直す
第13回	これまでの習得技術でプレゼンテーションを行う
第14回	8．研究デザイン（中間報告書提出）

回数	内容
第15回	9. 症例報告（ケースレポート）と症例集積（ケースシリーズ）
第16回	10. コホート研究と横断研究について調べる
第17回	11. 後ろ向きコホート研究について調べる
第18回	12. 介入研究と観察研究について調べる
第19回	13. 研究テーマに関連する先行研究を収集できるようになる
第20回	14. 統計学の基本を説明できるようになる
第21回	15. 発表の基本(レポート提出)を実践する
第22回	これまでの知識で各自のプレゼンテーションができるようになる。
第23回	16. 原稿の棒読みになっていないかが検証できる
第24回	17. 研究の重要性の主張 および対象と方法とデザインを明確にして振り返る
第25回	18. 結果：アウトカム...何を観察・測定・計測したかについて説明できるようになる
第26回	19. 考察：結果の解釈を説明できる
第27回	20. 結論と抄録の書き方の基本に則り作成する
第28回	総括(最終報告書提出)
第29回	研究発表を行う
第30回	修了試験の実施

授業外学習

救急医療系の標準教育プログラムであるBLS、ACLS(ICLS)、PSLS/ISLS、JPTEC/JATEC等に積極的に参加する。また、各種災害訓練やメディカル・ラリーに参加する。

全国レベルの学会・研究会に積極的に参加してもらう（参加費自己負担）。

教科書

上手な教え方の教科書 ～ 入門インストラクショナルデザイン 向後千春 技術評論社 ISBN: 978-4774174617

参考書

インストラクショナルデザインとテクノロジー: 教える技術の動向と課題 鈴木 克明 (監修, 翻訳) 北大路書房(2013/9/28)ISBN:978-4762828188

あなたのプレゼン誰も聞いてませんよ!ーシンプルに伝える魔法のテクニック 渡部欣忍著 南江堂 (2014/4/1)ISBN:978-4-524-26127-7

その他、授業中に紹介する。

備考

健康運動科学演習（HHM81）

前期

Seminar in Health and Exercise Physiology

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	22 ～ 22 HM
単位数	2．0 単位
担当教員	 荒木直彦  枝松千尋

授業の概要

本演習は、身体運動機能の測定を行う。基本的には、運動生理学・バイオメカニクスに関する実験機器の操作と分析資料の解読及び判定方法を実験を通して学習する。

到達目標

身体運動のメカニズムを理解し、健康運動を科学的に分析する能力を身につける。

評価方法

評価は、機器操作（30％）、分析資料の解読及び判定（30％）、レポート（40％）などにより総合的に評価する。
上記の評価方法により、到達目標の達成度を総合的に評価し、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

運動科学実験を行うために次のものを準備すること。
・ジャージ及びシューズ

授業計画

- 1週目：オリエンテーション（講義概要、講義方法及びスケジュールなど）（荒木・枝松）
- 2週目：体組成分析機器（InBody）の説明及び機器操作（荒木）
- 3週目：体組成分析実験（荒木）
- 4週目：体組成分析資料の見方及び判定評価（荒木）
- 5週目：ディスカッション（課題レポート1）（荒木）
- 6週目：筋電図装置の説明及び機器操作（枝松）
- 7週目：筋電図実験1（枝松）
- 8週目：筋電図実験2（枝松）
- 9週目：筋電図分析資料の見方及び判定評価（枝松）
- 10週目：ディスカッション（課題レポート2）（枝松）
- 11週目：筋電図・筋音図装置の説明及び機器操作（枝松）
- 12週目：筋電図・筋音図実験1（枝松）
- 13週目：筋電図・筋音図実験2（枝松）
- 14週目：筋電図・筋音図分析資料の見方及び判定評価（枝松）
- 15週目：ディスカッション（課題レポート3）（枝松）
- 16週目：等速性筋力測定装置の説明及び機器操作（荒木）
- 17週目：等速性筋力測定実験1（荒木）
- 18週目：等速性筋力測定実験2（荒木）
- 19週目：等速性筋力測定資料の見方及び判定評価（荒木）
- 20週目：ディスカッション（課題レポート4）（荒木）
- 21週目：床反力測定装置の説明及び機器操作（枝松）
- 22週目：床反力測定実験1（枝松）
- 23週目：床反力測定実験2（枝松）
- 24週目：床反力分析資料の見方及び判定評価（枝松）
- 25週目：ディスカッション（課題レポート5）（枝松）
- 26週目：動作解析装置の説明及び機器操作（枝松）
- 27週目：動作解析実験1（枝松）
- 28週目：動作解析実験2（枝松）

29週目：動作解析分析資料の見方及び判定評価（枝松）

30週目：ディスカッション（課題レポート6）（枝松）

授業外学習

学習時間の目安：合計30時間（予習、復習及び文献検索、レポート作成、測定実験）

身体運動に関する実験を行うため生理学的な人体の機能、安全性に関する対応について事前に理解しておくこと。

運動生理学的・バイオメカニクスの文献検索と理解、さらには専門的な知識の吸収に努める。

課題レポートは、単元ごとに年間6テーマを出題する。

教科書

使用しない。

参考書

講義中に配布

備考

特別研究（HHM65）

通年

Special Research

大学院 人間文化専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	21 ～ 19 HM
単位数	6．0 単位
担当教員	 権純珍

授業の概要

・特別研究では、金融の理論に基づいて金融市場の現状及び金融機関の行動等に関わる諸問題を考察・実証分析し、修士論文の作成・完成を目指す。

到達目標

- 1 修士論文の作成に必要な金融論及びミクロ経済学・マクロ経済学の基礎理論を理解・習得する。
- 2 修士論文を完成する

評価方法

・論文発表会での質疑応答や、論文の内容等により総合的に評価する。評価は、論文(60%)、質疑応答(30%)、その他(10%)。

注意事項

- ・指導内容を十分に予習及び復習することが必要である。
- ・金融論・国際経済学・国際金融論・ミクロ経済学・マクロ経済学・経済数学に関する、学部生として習得すべき知識、および英語読解力を持つこと。

授業計画

回数	内容
第1回	特別研究の概要(ガイダンス等)
第2回	論文テーマの検討・分析Ⅰ
第3回	論文テーマの検討・分析Ⅱ
第4回	論文資料の検討(先行研究Ⅰ)
第5回	論文資料の検討(先行研究Ⅱ)
第6回	論文資料の検討(先行研究Ⅲ)
第7回	論文資料の検討(先行研究Ⅳ)
第8回	論文のテーマと資料との妥当性Ⅰ
第9回	論文のテーマと資料との妥当性Ⅱ
第10回	論文のテーマと資料との妥当性Ⅲ
第11回	論文のテーマと資料との妥当性Ⅳ
第12回	論文のテーマと資料との妥当性Ⅴ
第13回	進捗状況に関する質疑応答Ⅰ
第14回	進捗状況に関する質疑応答Ⅱ
第15回	中間報告会
第16回	論文内容に関する諸問題の検討Ⅰ
第17回	論文内容に関する諸問題の検討Ⅱ

回数	内容
第18回	論文内容に関する諸問題の検討Ⅲ
第19回	論文内容に関する諸問題の検討Ⅳ
第20回	論文内容に関する諸問題の検討Ⅴ
第21回	第1回草稿の提出
第22回	第1回草稿の質疑応答Ⅰ
第23回	第1回草稿の質疑応答Ⅱ
第24回	修正及び質疑応答Ⅰ
第25回	修正及び質疑応答Ⅱ
第26回	修正及び質疑応答Ⅲ
第27回	第2回草稿の提出
第28回	第2回草稿の質疑応答
第29回	修正及び質疑応答(最終)
第30回	最終報告会

授業外学習

- ・金融論・国際経済学・国際金融論・ミクロ経済学・マクロ経済学やその関連文献を読み、自学自習すること。
- ・論文の進捗状況を発表できるよう準備しておく。

教科書

- ・特に指定しない。
- ・必要に応じて資料等を配布する。

参考書

- ・参考書及び文献等は必要に応じて随時、授業中に指示する。

備考